妖精大進撃！

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖精大進撃！

【Ｎコード】
Ｎ２５７６Ｄ

【作者名】
岳石祭人

【あらすじ】
「魔女クラリス物語」第１話。星の光が妖精の木に落ちて妖精が大発生！イタズラ好きの妖精たちにみんな大迷惑。その解決を全面的に押し付けられた魔女の娘クラリスは妖精の国に赴く。妖精を生みだし続ける星の光を、どうする？

第１章　お姫様のお城（前書き）

地図を作りました。
画像（６００＊４５０ｐｘ）はこちら→ｈｔｔｐ：／／ｅｉｇａｔｗｏ．ｕｐ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ｉｍａｇｅ／ＭＡＰ．ｇｉｆ
ブログの記事はこちら→ｈｔｔｐ：／／ｅｉｇａｔｗｏ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ａｒｔｉｃｌｅ／８３４６１２１５．ｈｔｍｌ
です。

第1章　お姫様のお城

夜の星がキラキラ真っ白な光を振りまきながら地上に落ちてきました。
落ちたところは妖精の国。
人間の知らない隠された場所です。
妖精の国には中心にそびえる大きな木が1本ありましたが、星はその中に入ってしまい、大きな木は全身から星と同じ真っ白な光をキラキラ放出しました。
まぶしくて妖精たちは大迷惑です。
さらに妖精たちにとんでもなく迷惑な事態が持ち上がりました。
それは・・・。

春の長雨が終わってこれから夏が始まろうという7月初めの頃のお話です。
お昼の食事を終えて、開けはなった窓からそよそよと気持ちの良い風が入ってきます。
「やっほー、クラリス～、おっひさー。
ねえねえちょっと聞いてよ、たいへんなことが起きちゃったのよー！！」
青い光が窓から飛び込んできたかと思ったら、それは宝石のサファイアの精でした。
クラリスは『しーっ』と唇に指を立てましたが、残念、遅かったです。
オーロラ姫はうーんと目を開けてしまいました。
「ほら。気持ちよさそうにお昼寝してたのに」
と怒るクラリスにサファイアの精は「あら、ごめんなさい」と謝りました。でもオーロラ姫はサファイアの精を見つけて大喜びです。

「あら、サファイア！　お久しぶりね」
「やっ、姫様。おひさー。えへへへー、順調なようねー？」
サファイアの精は飛んでいってオーロラ姫のお腹に抱きつきました。妖精は身長１５センチくらいで、背中に羽根があって、光っていて、空気みたいに重さはほとんどありません。
オーロラ姫は大きなまん丸のお腹をしています。おめでたです。再来月が予定日で、経過は順調そのものです。
クラリスはお腹の中の赤ちゃんが男の子か女の子か知っていますが、ないしょです。王様と王妃様は早く知りたくていろいろクラリスを誘惑してくるのですが、オーロラ姫が「生まれてくるまで絶対誰にも秘密よ！」と怖い顔で口止めするのでクラリスは誰にも言っていません。
「で、たいへんなことって何？」
「うん。あれ？リラは？」
リラはオーロラ姫の相談役の妖精です。クラリスが答えます。
「リラさんはカンパニアに行って留守よ」
「ララベル姫のとこか」
カンパニアはここロヴィーク国の首都で、ララベル姫は国一番の才女と名高いロヴィークの宰相です。
「そっか。リラにも女王様から言付けがあるんだけど、ま、いいや。んじゃヴァイオレットは？」
「ヴァイオレットはナージャとお散歩よ」
ヴァイオレットはクラリスのお友だちの火花の精で、ナージャはクラリスの愛馬のペガサスです。
「あっそ。ま、あの子はいいや。
たいへんなのよ、クラリス～」
「だからね、何がたいへんなのか教えてくれる？」
「妖精の国に星が落っこちてきたのよ！」
「あら、サファイアさんは妖精の国に居たの？」
「うん。里帰り中。ルピネーの奴、ペテロブラーグに行ってるんだ

もん。あたしあそこ嫌〜い」
　ルピネーというのはサファイアが名付け親の東の大国ラピスの政治家で、ペテロブラーグというのはそのラピスの首都で・・と言うのは今回のお話とは関係ないのでいいです。
「なるほど。それで、妖精の国で火事でも起こったの？」
「ううん。ぜんぜん熱くないよ。やたらまぶしいだけでね。
　それよりさあ〜、たいへんなのよ〜」
「どうたいへんなの？」
「妖精が、い〜〜〜〜〜っぱい、生まれちゃったの」
　あらまあ、とオーロラ姫が喜びました。
「妖精の国でもベビーラッシュ？」
　いやいや、とサファイアはかわいい顔を渋くして手を振りました。
「そんなかわいいもんじゃないのよ〜。もう、ウッジャウッジャ。考えるだけでも・・」
　サファイアは両手で肩を抱いてブルルッと震えました。クラリスも驚きました。
「まあ、そんなに？」
　サファイアはしかつめらしく指を振って
「そう！　あんまり次から次へ生まれてきて、まるで蜂の巣よ」
　クラリスは目の前のサファイアがいーっぱいいて、群れでブンブン飛んでいる姿を想像しました。
「それはまたずいぶんにぎやかそうね」
「だからそんなかわいいもんじゃないのよ〜」
　サファイアはぶるるんと青い光の粉を振りまいて飛び上がりました。
「生まれたばっかりの妖精なんて好奇心の固まりみたいなものだから、あっちこっち飛び回って突っつき回して、キャーキャー喜んで、もうとんでもない大迷惑よ！」
「それはご愁傷様。でもかわいい妹たちなんだから面倒見てあげなくっちゃ」

妖精に男と女という区別はありませんが、みんな女の姿をしています。
「冗談じゃないわ」
サファイアはしっしっと手を振りました。
「子どもの面倒なんて面倒くさくて見てられるものですか」
あらあらとクラリスとオーロラ姫は顔を見合わせました。
「妖精って子ども好きだと思っていたけど？」
サファイアはすまして言いました。
「人間の子どもは好きよ。遊んでやると面白いもん。面倒なお世話はお母さんの仕事だしね。でも妖精の子どもなんてうるっさいだけよ！」
二人はまたあらあらと思いました。サファイアは何か思いだしてニコッと二人に笑いかけました。
「でね、女王様もうんざりしちゃってえ」
「ちょっと待って」
クラリスが手で止めて、ジロッとサファイアを睨みました。
「妖精の国の女王って、ダイヤモンドさんがなったんでしょ？」
「うん。ダイヤ姉さんよ」
ダイヤモンドの精はオーロラ姫の旦那さんのシルバー王子の名付け親で、サファイアとは同じ宝石の妖精仲間で姉のように慕っているのです。クラリスの知るところ、妖精の中ではリラと並んでしっかり者のはずですが・・。
「クイーンダイヤモンドがどうされたの？」
サファイアはえへへっと笑って言います。
「新しく生まれた妖精たちにね、ここより人間の世界の方がずうっと楽しいわよって教えてあげたの」
「なんですって！？」
とクラリスは驚き、
「まあ！！」
とオーロラ姫は喜びました。

「じゃあ、なに？　来るわけ？その蜂の群みたいな妖精たちが、ここへ？」
「そゆこと。だから、面倒見てやってくださいな。好きでしょ？妖精？」
　ああ荷が下りたと、サファイアはさっぱりした顔で笑っています。
　クラリスはこれから起きる事態を想像して心配しましたが、
「クラリス～」
　と、また窓の外から呼ぶ声がしました。見ると、真っ白な美しいペガサスナージャが大きな真っ白な翼を羽ばたかせ、そのたてがみに小っちゃな赤い髪の女の子が捕まっています。背中に羽根を生やした火花の精ヴァイオレットです。
「クラリス～。たいへんたいへん！」
　クラリスは何かと頼られます。まだ子どもなのに。
「どうしたの、ヴァイオレット？　蜂の群にでも追いかけられたの？」
「蜂じゃないよお～」
　ヴァイオレットはあたふた慌てふためいて喋りました。
「妖精だよ！　もんのすごい数の！！　あたいあんなたくさんの妖精見たことないよ～」
　ヴァイオレットは自分も妖精のくせに妖精が怖いのです。ちびっ子のヴァイオレットは妖精の国で同じ火の一族にいじめられて妖精の国を飛び出したという暗～い過去があるのです。
「うわ～ん、来るよお～」
　どれ？とクラリスが窓から外を見ると、真っ青によく晴れた空が、なんだかだんだん白く濁ってきて、チカチカ赤や青や緑や黄色に光ってきて、それがだんだん、ぐんぐん迫ってきて・・
「うひゃあ～っ」
　ペガサスナージャはものすごい勢いで天高く駆け上がり、ヴァイオレットもくっついていきました。
　チカチカ虹の光が迫ってきて、その中にニコニコ無邪気な無数の

女の子たちの笑顔を見て、
「きゃっ」
と叫んでクラリスは反射的にバリアを張って自分とオーロラ姫を守りました。サファイアもちゃっかりその中に避難しています。
ザアーッと、光の大群が窓から飛び込んできて、あっと言う間に部屋に充満しました。
「わーい、人間だ人間だ」
「ここってお城よね？　じゃ、お姫様だ！」
「お！　お腹がおっきいぞ！」
「触りたーい！」
「なんだこれ？　邪魔して入れないぞ？」
「あの子だ！　あの子があたしたちの邪魔してるんだ！」
「なんだあいつ、人間のくせに生意気だぞ」
「あ、妖精がいるぞ！　こらー、裏切り者ー！　あたしたちも中に入れろー！」
「お姫様に触らせろー！」
「ギャーギャーギャー」
ビックリして、ニコニコ見ていたオーロラ姫も、ちょっと心配になってクラリスの顔をうかがいました。
「たしかに。ちょっとやかましいわね」
クラリスはむっつりした顔で人差し指をピンと弾きました。するとオーロラ姫の寝椅子を中心に張られた薄緑色の光のバリアがビイ〜ンンンと震えて、そのショックに妖精たちはキャアと弾かれました。
「うわーん、この子怖〜い」
「魔女だ魔女だ！」
「そうよ！」
クラリスは腰に手を当てて凄みました。
「わたしは魔女のクラリス。あんまり騒いでわたしを怒らせると、あんたたち妖精なんか、み〜んな、ただの光に変えてしまうわよ」

いや～んと妖精たちは逃げまどい、窓からみんな逃げていきました。
「やれやれ」
クラリスがバリアを解くと、サファイアがすーっとクラリスから離れました。
「なに？」
「まさかあたしを光にしようなんて思わないでしょうね？」
クラリスは軽やかに笑いました。
「そんなこと、あのやかましいお嬢ちゃんたちにだって思わないわよ」
サファイアはほっと安心しました。やっぱりまだこの小さな魔女に対する警戒心が残っています。
窓の外から妖精たちの気配が消えて、ナージャが下りてきました。
「ヴァイオレット。おチビちゃんたちはどうした？」
「うん。町の方へ下りていって、半分くらい南の方へ飛んでいったぞ」
「カンパニアに向かったのね。サファイアさん。リラさんにもお話があったんでしょ？」
「カンパニアにいるならいいや。ララベル姫のとこなら、どうせミラから連絡が行ってるだろうし」
ミラは鏡の精。ララベル姫の名付け親です。姫は鏡を通して妖精の国のミラと会うことが出来るのです。
「リラさんになんのお話だったの？」
「一度妖精の国に戻ってきてくれって」
「この件で？」
「そうよ。妖精の木からはまだまだ妖精たちが生まれてくるのよ。それをなんとかしないと、今でももうじゅうぶん手に負えないのに、たいへんだわ」
「ふうーん、そうねえー」
クラリスのふうーんにはちょっと疑いの気持ちが混じっています。

クイーンダイヤがリラに帰ってきてほしいのは今回の件の相談ばかりではないでしょう。クラリスは気持ちを切り替えて言います。
「たしかにそうよね。オーロラ姫。妖精たちが入ってこられないようにこの部屋には結界を張って、わたしは町の様子を見てきます」
オーロラ姫はちょっと不安そうです。
「サファイアさん、お願いします。だいじょうぶ、どうせすぐにリラさんが飛んで帰ってくるわ」
それを聞いてオーロラ姫も安心しました。
クラリスは手のひらに緑色の光の玉を作ると、ほいほいと部屋の隅に投げていきました。部屋の壁や床や天井がぼんやり緑色の光を発しました。
「効果は2時間。それじゃ行ってきまーす」
ここはお城の3階です。クラリスは窓から直接ナージャの背中に飛び移ろうとしましたが、はしたないので廊下に出ました。
階段を下りていくとあちこちからスタッフたちの悲鳴が聞こえてきます。ビュンビュンカラフルな光が飛び交い、偉い執事さんや侍女たち、使用人や女中たちが逃げまどっています。みんなクラリスを見つけると助けを求めるので、クラリスは「はいはい」と魔法の指で妖精たちを弾いてやりましたが、なにしろ至る所にいますし、妖精たちもおっかない魔女を見つけると物陰に潜み、やり過ごすとまた暴れ出すという悪賢いところがあって、クラリスにもお手上げです。
『これはイナゴよりやっかいだわ』
と思いました。
ホールから表に出ると賢いナージャがちゃんと待っていました。ヴァイオレットもくっついています。クラリスはフワリとナージャの背中にまたがり、ナージャは翼を羽ばたかせて空に飛び上がりました。
あんのじょう町は大混乱です。

妖精たちは人間を見つけると大喜びでまとわりつき、特におしゃれをした女の人が大好きで、その髪の毛を引っ張ったり、潜り込んだり、勝手に別の髪型に変えてしまったり、おしゃれなドレスも同様です。妖精は魔法を使えますし、自分のカラーを持っています。魔法で勝手にドレスの色を変えたり、それならまだしも、髪の毛の色まで青やピンクに染め上げ、顔にイタズラ書きまでしました。町中から女の人の金切り声が上がっています。

子どもたちは妖精を見つけると大喜びして追いかけました。しかしそれも最初だけで、追いかけていくと妖精はその何倍、何十倍の数で逆に追いかけてきて、子どもたちは泣き喚きながら逃げまどいました。あんまりひどいイタズラにはクラリスがお仕置きをしてやりました。

しかしとにかく数が多い。クラリス一人ではとてもめんどう見切れません。

さーてどうしてくれようかしら？

クラリスは空の上から眺めながら思案しました。

遠くから紫色の光がものすごい勢いで飛んできて、クラリスはああ来たわと思いました。

紫の光はナージャにぶつかりそうな勢いで突っ込んできて、クラリスのすぐ鼻先で急停止しました。

「クラリス！　オーロラは！？」

オーロラ姫の相談役、リラの精です。彼女はオーロラ姫の名付け親でもあり、赤ちゃんの頃から見守っていて、第2のお母さんのようなものです。

「だいじょうぶよ。部屋には結界が張ってあるし、サファイアさんもいっしょよ」

「ああ、そう。サファイアがいっしょなら気が紛れることはたしかね」

リラはほっと息をつきました。やはり気が気でなく、全速力です

っ飛んできたようです。
「カンパニアの方はどうです？」
「わたしと入れ違い。群れを突っ切ってきたから」
クラリスはリラの精が妖精たちをポンポンボーリングのピンのようにはね飛ばしている様を想像しました。
「この様子じゃああっちも今頃たいへんね」
リラの精も下の大騒ぎを眺めて困ったため息をつきました。
「どうしたものか・・」
「リラさん、わたし考えたんですけれど」
クラリスは賢い顔で言いました。
「ちょっときついやり方になっちゃうけれど、妖精たちを大人しくさせてもいいですか？」
「ええ！」
リラの精はビックリして目を丸くしました。
「出来るのならね。出来るの？」
「ええ。たぶん」
クラリスは小首を傾げましたが、その顔は自信ありです。
「そ。じゃ、任せるわ」
「はい。それじゃあリラさん、オーロラ姫の部屋に入ったら窓をぴったり閉めて、姫のタオルケットの中にでも隠れていてください」
「何をする気？　ちょっと怖いわね？」
クラリスは眉を弓なりにして目を細めて微笑みました。
「そりゃあ、魔女のやり方ですもの、怖いですわよ」
「おお、こわ」
リラの精は震え上がって見せて、頼んだわよ、とお城向かって飛んでいきました。

クラリスはリラの精が安全に避難するまでしばらく待ちました。
「よおクラリス～。何する気だ？」
不安そうに言うヴァイオレットを、

「あんたもここに避難してなさい」
と、自分のドレスの胸の中に入れてやりました。
さて時間を見計らって、
『オッホン。
妖精諸君に告ぐ。
わたしは魔女のクラリスです。
ただちにイタズラをやめ、人間に迷惑をかけることをやめなさい』
クラリスのテレパシーは町のみんな、妖精、人間を問わず、聞こえているはずですが、妖精たちは一度キョロキョロしただけで、すぐにまた人間たちへの容赦ないイタズラを開始しました。人間たちにもクラリスのテレパシーは届いているので、妖精たちのイタズラに再び悲鳴を上げると、クラリスに切実な助けを求めました。
「よーし、聞く気はないようね」
クラリスは天のお日様に向かって右の手のひらを開きました。
手のひらにお日様の光が集まって、玉になり、どんどん白くまぶしく輝きだしました。えりの合わせから覗いていたヴァイオレットも、そのまぶしさに慌ててドレスの中に潜り込みました。
「ナージャも目を閉じていてね」
クラリスは下界の妖精たちに警告しました。
『言うことを聞きなさい！
でないと、
こうよ！』
クラリスの手から光の玉が放たれ、それは大きく空いっぱいに広がると、すぐ側に太陽があるように真っ白にまぶしく輝きました。
それを見た妖精たちは
「わー」
「きゃー」
と慌てて目を閉じましたが、
「やだやだやだ！　やめてーっ！！」
妖精たちの体はほとんど光でできているのです。ちょうど良い強

さの光はよい栄養になりますが、あまりに強すぎる、しかも太陽の真っ白な光は、妖精たちのカラーを消してしまい、その体を消し飛ばしてしまうのです。
空はまぶしく真っ白に輝いています。人間もそのまぶしさにとても目を開けていられませんが、妖精たちは目を閉じたって体が真っ白な光に漂白されてしまいます。
「わあ～ん、分かった分かった、降参するよ～」
もちろん建物の中や物陰に避難していた妖精もたくさんいましたが、外の仲間たちの体が消えそうになるのを見てみんなすっかり怖くて震え上がってしまいました。
パッと真っ白な光が消えました。
『よろしい。イタズラしないで、人間と仲良くするのよ』
はあ～い、と、妖精たちは返事をして、また人間たちで遊びだしました。けれど今度は空の上の魔女が怖くて、ちょっと遠慮気味です。
クラリスはリラの精にテレパシーを送りました。
『リラさん。だいじょうぶでしたか？』
リラの精のテレパシーが返ってきます。
『ええ、わたしもサファイアもだいじょうぶよ。さすが、お見事なものね』
『エヘヘー。わたし、このままカンパニアに行ってきます』
『ええ、お願いね』
「それ、ナージャ」
ナージャはヒヒーンと上品にいなないて、天を駆け出しました。
オーロラ姫の部屋ではリラの精がテレパシーで見送って、感心しながら言いました。
「ほんと、末恐ろしいわね。あれで大人になったらどんなすごい魔女になるのかしら？」
オーロラ姫はニコニコしています。

「もちろん、素晴らしい魔女になるに決まっているわ！」

魔女クラリス。

ふわふわでくるくるの柔らかい茶の髪をして、ほんのり赤みの差した白い肌をして、お人形のように可愛らしく整った顔に紫がかった緑色の大きな宝石のように綺麗な瞳をした、９歳の少女です。

しかし彼女は、現役で世界最高の魔女なのでした。

第1章　お姫様のお城（後書き）

登場キャラクターの名前でお気づきでしょうが、これは「眠れる森の美女」の後日談です。ですが、この世界を舞台にした「眠れる森の美女」の物語も存在します。そちらも折を見て掲載しようと思います。

第2章　妖精の国へ

カンパニアの妖精騒動もクラリスの魔法で収まりました。
クラリスは王宮「パレス」にお偉い方々を表敬訪問しました。
とは言え知った仲なので直接執務室におじゃましました。
「おお、クラリスよ。よくぞ騒ぎを収めてくれた」
王様です。ちょっとお年を召しています。
「クラリス。ありがとう」
シルバー王子です。おとなりのルービッシュ国の第1王子でしたが、王位は弟君に譲られて、オーロラ姫と結婚してこのロヴィーク国にお婿さんに来てくれたのです。ハンサムで、鍛えられた体をして、その上人格者で、ロヴィーク国では大歓迎されました。23歳。ちなみにオーロラ姫は19歳。王子はこうして首都カンパニアで王と宰相ララベル姫の下、次代の王として勉強中です。単身赴任がちょっと寂しいですが。
「クラリス様。ありがとうございました」
ララベル姫です。姫といっても王家の分家の分家の分家の分家の・・というほとんど赤の他人ほど血筋の離れてしまっている、「姫」とは市民の親しみと尊敬を込めた呼び名ですが、まことその名にふさわしい気品と賢さを持った人です。女性に年齢のことを言うのも失礼ですが、今年ちょうど30歳。独身です。娘と言っていい可憐な方ですが、頭が良すぎるのと、忙しすぎるのが結婚に恵まれない原因でしょうか？　本人にもちっともその気はないようですが。
その他に政府の高官の方々がいらっしゃいますが、皆クラリスに感謝と尊敬の念を表明し、子どものクラリスには恥ずかしいばかりです。
そこにもうひとかた、
「まあ、クラリスちゃん！」
王妃様です。お年を召した王様にはちょっと不釣り合いなほどお

若いお后様ですが、これにはちょっとした事情があるのですが、ま、それはこの話には関係ないのでまたいずれ。
「いらっしゃい！　まあまあまたそんな男の子みたいなかっこうして。もっと可愛らしいドレスでおしゃれをしなくちゃ！」
クラリスは別に男のようなかっこうをしているわけではありません。明るい紺色のふつうのドレスを着ています。でも王妃様はかわいいクラリスが大好き！なのです。大人になって結婚してしまったオーロラ姫の代わりにクラリスを自分の娘のようにかわいがっているのです。そのかわいがりぶりは、クラリスにとってはちょっとはた迷惑ですが。
さっそくクラリスを自分の部屋に連れていこうとする王妃を王様がいさめました。
「これこれ后や。クラリスとはこの困った事態の相談をせねばならぬ。頼むから少し遠慮しておくれ」
王妃様はピッと眉を吊り上げました。
「この子にあんな忌まわしい物どもの相手などさせてはなりません！」
クラリスはシルバー王子と顔を見合わせて苦笑しました。王妃様は妖精が嫌いなのです。原因は、オーロラ姫がリラの精とばかり仲良くして、自分を相手にしてくれないからです。
そんなに赤ちゃんみたいにかまいたがるから・・とみんな思っているのですが、王妃様の癇癪を恐れて口には出しません。
本当にいつまでも子どもみたいな人です。
その王妃様もララベル姫には逆らえず、姫のお願いで渋々部屋へ引き返していきました。
「さて。のうクラリスや、街に溢れ返るあの者どもを、いったいどうしたものかのう？」
王様もさすがのララベル姫も困ってしまっています。クラリスだって困ります。

「大人しくしていれば人畜無害なのですけれどねー」
妖精は光さえあれば生きていられるはずですから、イナゴのように畑を食い尽くすような災害はありません。けれど、
「何しろ妖精ですからねえー」
イタズラ好きで、無責任で、その上魔法が使えます。
「あれだけの数がいれば、きっと何か事件をやらかすでしょうねえ」
それを考えてみんなう〜むと頭を悩ませました。
王様は訊きました。
「さっきの魔法で妖精を消してしまうわけには・・」
「いけません」
クラリスは怖い顔で王様を叱りました。
「わたしが許しません」
王様は分かった分かったと手を振りました。
「打つ手はなしか。何事も起こらねばよいのだがのう」
「そうですねえ」
王様の心配顔を見るとクラリスもちょっと責任を感じてしまいます。ララベル姫に訊きました。
「ミラとは話したんですよね？」
鏡の精ミラです。
「ええ」
ララベル姫は綺麗な手鏡を取り出しました。これが妖精の国のミラと話せる魔法の鏡なのです。
「妖精の国でもかなり困っているようですよ。とにかく妖精たちは生まれ続けているのですから」
すでにこれだけの大群がいながら、まだまだ生まれてくる。これじゃあじきにロヴィークの人間の数を追い越し、大陸中、いえ、世界中の人間より多くなってしまうかも知れません。
クラリスはやがて海を渡って大移動する妖精の群れを想像しました。
「世界中で大迷惑ね。妖精なんて珍しいから珍重されるのに」

ララベル姫がクスクス笑って、王様に失礼しましたと謝りました。
「女王様もとんだお荷物を押し付けてくれたものですね」
「そうよ！」
クラリスも腰に手を当てて怒りました。
「ダイヤさんも無責任だわ」
『こらこらクラリス。女王様に無礼ですよ』
と声のしたのはララベル姫の持つ手鏡の中から。姫が鏡をみんなに見せると、鏡の中に銀色の粒が渦巻いて、女の人の顔を形作っています。鏡の精ミラです。
「あらごめんなさい、ミラさん。でもねえ、これって妖精たちの問題でしょ？　人間に迷惑かけてほしくないわ」
『ですからね、女王もほとほと困っておいでなのです。リラはどうしました？』
「オーロラ姫のところへすっ飛んで帰りましたよ」
『やっぱりねえ・・』
鏡の中の銀色の顔がほうっとため息をつきました。
『女王はリラに妖精の国に帰ってきてもらって、この事態をなんとかしてほしいと頼っておられたのですが・・』
銀色の顔はジロッとクラリスを睨みました。
『じゃああなたがこっちに来てなんとかなさい』
「なんでわたしがあ？」
『オーロラ姫のお友だちでしょう？　姫のせいでリラが帰ってこないなら、あなたが代わって責任をとりなさい』
「ミラさん。それは責任転嫁と言うんですよ」
『人間の言葉なんて知らなーい。・・子どものくせに生意気な』
「聞こえてますよ」
「クラリス」
声をかけたのはシルバー王子です。
「ダイヤのために力になってくれないか？　君なら、出来るだろう？」

クラリスはちょっぴり恨めしそうに王子を見ました。王子は優しい笑顔でクラリスを見つめています。クラリスはハア・・とため息をつきました。王子に頼まれたのでは嫌とは言えません。

「分かりました。けれどねえ、どうやったら妖精の国に行けるの？

わたし妖精の国のあるところなんて知らないわよ」

『知らなくてけっこう。国の最重要機密です』

過去妖精の国に行ったことのある人間は、なんと、王妃様ただお一人です。

『全身の映せる姿見の前へ行きなさい』

「こちらへどうぞ」

ララベル姫に案内されて、クラリスと、王子と王様と、結局みんなぞろぞろついて廊下に出ました。

クラリスはララベル姫に文句を言いました。

「わたしまだ子どもですよ？　姫も女王もわたしなんかに頼って、いいんですか？」

ララベル姫はフフーンと鼻歌でも歌うように笑って言いました。

「あなたは生まれたときから特別の子どもなんです。運命と思ってあきらめなさい」

「はいはい」

クラリスも自分が特別の存在だと分かっているので反論しません。ただ嫌味の一つも言ってやりたくなるだけです。ララベル姫は最高に優秀な政治家なのでクラリスごとき子どもの嫌味なんてまるで相手になりませんが。

「なになに？　なんの騒ぎ？」

何か面白そうな気配に王妃様が侍女を引き連れてやってきましたが、

「わたし、どうやら鏡を通って妖精の国に誘拐されるようなんです」

とクラリスが言うと、

「よ、妖精の国・・」

王妃様は顔を真っ青にしてご自分の部屋に逃げ帰りました。王妃

様はたしかに妖精の国に行ったのですが、あちらにいる間の記憶は一切ないのです。そもそもそれを知っているのはクラリスとリラとミラと、ごくほんの一部の妖精たちだけです。おっとこれも関係ない話でした。

ララベル姫はクラリスたちを王様の謁見室に連れていきました。王様が外国の使節などと会う部屋です。奥に長く、一番奥に王様の玉座が置かれ、その手前、謁見する者が立つ場所の左右の壁に大きな一枚鏡がそれぞれはめてあります。謁見する者が王様に対して何かよからぬことをしないか、どこから見ても一目瞭然のような仕掛けですが、幸いこのロヴィークでそのような恐ろしい事件の起こったことはありません。

クラリスはその大きな鏡の前に立たされました。

『では妖精の国への扉を開きますよ』

大きな鏡一面に銀色の粒子が渦巻き、虹の七色に輝くと、銀色の髪をした綺麗な女の人が現れました。居合わせた人たちは皆「おお」と声を上げました。銀色の妖精です。でもこんな大きな、人と同じ背丈の妖精を見ることは滅多にありません。

『あなたが入って来やすいようにサービスです。あなたなら、こちらに来れますね？』

「ああ、なるほど、そういうことね」

クラリスはフムフムとうなずき、ララベル姫に頼みました。

「ここにベッド・・が無理なら長椅子を運んでいただけませんか？」

王子が気軽に引き受け、偉い官吏の人といっしょに綺麗な長椅子を運んできてくれました。

「じゃあちょっと行ってきます」

と言うとクラリスは椅子にペタンと座り、そのままくたっと寝てしまいました。

どうしたのだろうと不思議に思っていると、なんと、クラリスはもう鏡の中に居ました。

「お得意のやつだな」

王子はニヤリとしました。クラリスのもっとも得意な魔法は夢の世界を通じて人の心の中に入り込む魔法です。この鏡はその夢と同じ役割を果たしているのです。

クラリスは今心だけ妖精の国にいるのです。

クラリスは銀色の妖精に向かい合うとちょこんとスカートをつまんで挨拶しました。

『直接お目にかかるのは初めてですね。よろしくお願いします、ミラさん』

『こちらこそよろしく。お目にかかれて光栄よ。では、女王のところへまいりましょう』

クラリスが鏡のこちらに手を振ると、鏡は元のように鏡を見る人たちと部屋の様子を映しました。

妖精の国は、なるほど、真っ白な眩しい光が溢れ返っています。しばらく目を細めて慣れてくると、いましたいました、色とりどりの妖精たちがあちこち群れをなして飛び回っています。見た感じ今現在もうパンク状態で、女王が「出ていけー！」と思わず言ってしまう気持ちも分かります。

妖精の国の道路は緑の木で出来ています。円上に生えた木が、枝を絡ませ合って、ちょうどお城の螺旋階段のようにホール・・広い空間を取り囲んでいます。

「このマンションが何重にも重なって外に広がっているのよ」

とミラが教えてくれました。クラリスたちがいるのはその一番内側の「マンション」でたぶんエリートたちの居住区です。このミラの家があるのですから。

木の枝にはたくさん、色とりどりの大きな花が咲いていました。同じ木の枝でも咲いている花はさまざまです。それが妖精たちのお家になっているのです。たいていの花は大きく開いて、天井が開け放たれていますが、ミラのお家の花は黒に近い濃い紫のチューリッ

プで、天井は少ししか開いていませんでした。鏡を見るために外の明かりが邪魔だからでしょう。
　広い空間の真ん中にひときわ大きな木が生えていました。白い光はここから発せられていて、真っ白な中にも時折キラキラ銀色に輝く粒子が放出されています。
「あれが妖精の木。この妖精の国を支えている、妖精の国そのものと言っていい木よ。周りのマンションの木々はみんなあの妖精の木の子どもたち。わたしたち妖精も、多くはあの木から生まれてきたわ」
　妖精の木は、マンションの木と違って幹がうんと太く、まっすぐ上に長く伸びて、天井に大きく枝葉を広げ、この妖精の国をすっぽり覆っています。
「白バラの森に似ているわね」
　とクラリスは呟きました。白バラの森はクラリスのお母さんとお父さんが住んでいる森です。ミラはちょっと嫌な顔をして、聞こえてないふりをして無視しました。
「ダイヤ女王はどこにいらっしゃるの？」
「マンションの最上階よ。飛べる？」
「わたしにとっては夢ですもの、簡単よ」
　クラリスはマンションの枝の外に飛び降り、フワリと浮かんで見せました。
「ほーんと、人間のくせになんでも出来る子ね」
「魔女ですから」
　ミラは小憎らしそうに笑って、「こっちよ」と自分も飛んで上へ先導しました。銀色のミラは飛ぶと銀色の光の粉を振りまきます。
　二人が飛んでいると妖精たちがクラリスを見つけて寄ってきました。
「なんだこいつ、羽根がないぞ？」
「体も光ってないぞ？」
「こんな妖精見たことないぞ？」

「こんな奴、あたしたちの仲間じゃないぞ」
「やっつけちゃえ」
「やっつけちゃえ！」
わーっと妖精たちが群れで襲ってきました。
「こらっ！　あんたたち、やめなさーい！」
ミラが金切り声を上げて止めようとしましたが、数に押されてポーンと弾き飛ばされてしまいました。あーれー。
無邪気な顔をした妖精の悪ガキどもはクラリスに押し寄せます。
「それっ」
いっせいに躍りかかりましたが、
「うわっ、こら、はなせ！　あたいは仲間だよお！」
「あれ、どこに隠れた？」
「いないぞ？　どこ行った？」
妖精たちはキョロキョロしましたが、クラリスの姿は見えません。
「消えたぞ！？」
「透明になったんだ！」
わーきゃーと爪を立てて辺りを引っかき回しましたが、何も触りません。
「どこだどこだ？」
「こっちよ」
クラリスは近くの花の一つから顔を覗かせました。
「いたぞ！　捕まえろ！」
またわーっと押し寄せます。
「イテイテ！　踏むな！　掴むな！」
「また逃げたぞ！？」
「こっちよー」
クラリスはまた少し離れた花の中から顔を出してこっちこっちと手招きました。
「すばしこいやつめ！　今度は逃がすな！」
妖精たちは周りを取り囲んで逃げ道のないようにして

「せーのっ！」
で飛びかかりました。勢いに花びらがぐしゃぐしゃに潰れてしまいました。
「いない！　また消えた！！」
妖精たちは慎重に辺りを捜しました。
クラリスは彼らの上に浮かんでいました。
「こいつう！」
「あなたたち。わたしを誰だと思っているの？」
「誰なんだよお？」
「わたしはね・・」
クラリスは両手を前に出してだらんと下げました。
「お化けなのよお～」
ヒュ～ドロドロドロン、と怪しい効果音が聞こえてきて、妖精たちは不安そうにキョロキョロしていましたが、
「バアッ」
クラリスが脅かすとキャーと悲鳴を上げて散っていきました。
やれやれと思っているとミラが帰ってきました。
「あなた子どもの扱い上手ねえー。・・子どものくせに」
「聞こえてますってば。慣れてるんです」
火花の精ヴァイオレットのお相手で、子どもの妖精と遊ぶのは慣れています。もっともヴァイオレットは子どもの姿をしていますが、クラリスが生まれるずーっと前からこの世に存在しています。

ようやくマンションの最上階に到着しました。
いくつか下の枝のものよりずっと大きな花が咲いていますが、その中でも特に、ちょっとしたお城くらい大きな、白い花びらに黄色い筋の通った花が咲いていました。槍を持った凛々しい妖精たちが守り、寄ってくる子どもの妖精たちをしっしと追い払っています。
「失礼します」

とミラが花びらのすき間から中に入り、クラリスも続きました。
床が丸く沈んでいるのでふわふわ飛んで進みます。中央に雌しべがそそり立ち、雄しべの黄色いシャンデリアがぶら下がっています。その根元に大きな黄色の花粉のソファがあり、そこに白い体に金色の髪、青い瞳をしたとびきり美人の妖精が座っていました。
ミラはひざまずいて報告しました。
「女王陛下。人間界より魔女クラリスをお連れしました」
ダイヤ女王は　鷹揚（おうよう）にうなずき、言いました。
「ご苦労。遠い国より大儀であった。苦しうない、近こう寄れ。
・・・なあーんちゃって。ああーん、クラリスー、よく来てくれたわあ！」
畏れ多くもダイヤ女王様はご自分から飛んできてクラリスの手を握りしめました。
「女王ダイヤモンド様。妖精の国の女王就任おめでとうございます」
クラリスは深々お辞儀しましたが、
「それって嫌味？」
ダイヤ女王はすごーく嫌な顔をしました。
「まったく冗談じゃないわよ。あーあこんな退屈な仕事、貧乏くじよ貧乏くじ！　だーれもやりたがらなくって、わたしがジャンケンで負けたのよお～！」
ミラはご冗談をと渋い顔をしましたが、ダイヤ女王は
「今すぐにでもあなたに冠を譲るわよ」
と上を指さしました。シャンデリアの先に宝石でごってり飾られた冠がぶら下がっています。
「まっ！　あのようなところに」
ミラは困った顔でたしなめましたが、ダイヤ王女は駄々をこねました。
「もうイヤッ、こんな生活！　クラリス！わたしを人間界に連れていって」
手を組んで体をすり寄せてきますが、クラリスは丁重に押し返し

ました。
「ダイヤさん。おふざけも大概に。たいへんなんでしょ？」
ダイヤ女王はフッとあきらめてキリッとした顔になりました。
「次から次へと妖精が生まれ続けています。
そもそも妖精は世界の象徴的存在です」
分かりますね？と訊かれてクラリスは頷きました。女王も頷き、一応整理するために話しました。
「例えばわたしはダイヤモンドの精。ミラは鏡の精。リラは花のリラの精。
ダイヤモンド、ミラー、リラと言えば、それぞれの妖精を呼び表すことになります。
一つの要素に妖精は一人です。ダイヤモンドもミラーもリラも、妖精は世界に一人ずつです」
クラリスは頷きます。
「しかし、今生まれ続けている妖精たちは、でたらめです。そりゃそうです、あれだけの数が生まれ続けて、世界にそれほど世界を形作る要素なんてあるものですか。
彼らは、ハイブリットです」
「ハイブリット？」
「混合種。花の要素も、植物の要素も、宝石の要素も、鉱物の要素も、みんな適当にでたらめに持っていると思われます。つまり」
ダイヤ女王はクラリスを指さしました。
「人間の魔女のように、なんでもありです」
「はあ、なるほど」
なんでもありと指さされてなんですが、クラリスは素直に頷きました。
「それはもはや、世界の象徴と言うより、妖精という生き物の一種です」
ダイヤ女王は自分の言葉を考え、
「どう思います？」

とクラリスに問いました。クラリスも考えています。
「新しく生まれている妖精たちは、この世界の仕組みとは別の仕組みで出来ている？」
ダイヤ女王は賢いクラリスにニッと笑って頷きました。
「そう思います。それもそうでしょう、彼らは、空から落ちてきた、あの光から生まれてきているのですから」
妖精の木の星の光は、白い大きな花びらを通して内部にも強く射し込んでいます。

第3章　妖精の木

妖精の国の女王ダイヤモンドの精と魔女クラリスの検討会は続きます。
「空から落ちてきたあの光。あれはいったいなんでしょう？」
ダイヤ女王の問いをクラリスは考えます。
「光が降ってきたんですよね？　人間界に降ってくる星はみんな硬い岩ですよ？」
「ここに降ってきたのは眩しい光だけです」
「隕石ではない、と。・・さっぱり分かりませんね」
クラリスはお手上げのポーズを取りました。
「考えてもしょうがないですから見に行きません？」
「そうですねえ・・」
ダイヤ女王は気後れして言いました。
「わたしたちにはあの光は強すぎます」
「あ、そうか」
クラリスは人間界で真っ白な光で妖精たちを消してやるぞと脅してきたところです。
「じゃ、わたし一人で行ってきます」
「あなたは平気なの？」
「ええ。まぶしいから目をつむって行きますけど」
どうせ今のクラリスは心だけの存在ですから平気です。たぶん。
ダイヤ女王は頼もしそうにニッコリ笑いました。
「あなたが来てくれてよかったわ。この問題はわたしたち妖精の手に余ります」
「女王様まで子どもを頼らないでください」
クラリスも笑って、
「じゃあちょっと行ってきます」
と、浮き上がると、スーッと花びらの外へ滑るように飛んでいき

ました。
ミラが見送って言いました。
「末恐ろしい魔女ですね」
ダイヤ女王は頷き、けれど笑顔で言いました。
「わたしはあの子が大好きよ。あの子なら、いずれ世界の王になるかもしれないわ」

クラリスはスーッと妖精の木に近づいていきました。
近づいて行くに連れその巨大さが圧倒します。人間の世界で言えば幹の周りは１００メートルはあるでしょう。今クラリスは妖精と同じ大きさに縮んでいますので、実際の人間の尺度で見るとどんなものか分かりませんが。ただ、この妖精の世界は人間の世界とは成り立ちが違うので、この世界の内部の物事は、外から人間の尺度では測れないのです。
クラリスが飛んでいくとまた妖精の子どもたちが好奇心剥き出しの顔で寄ってきましたが、
「よせよせ、そいつはお化けだぞ！」
と誰かが言って、みんなキャーと逃げていきました。
「こんなかわいいお化けのどこが怖いっていうのよ」
クラリスは文句を言いましたが、自業自得です。
近づくとまぶしさはどんどん増していって、目を細めていたクラリスはとうとう目を閉じました。
心の体で目を閉じたらどうなるのか？
閉じてみると、一瞬の黒の後、また真っ白な光が溢れました。
目を閉じる意味がないのでしょうか？
いえ、見え方が違います。真っ白な中にも微妙な強弱が感じられます。微妙な色彩の変化も感じられます。光の呼吸さえ感じられそうです。
『生きている？』

とクラリスは感じました。クラリスはもっともっと光の気持ちを感じるように探りながら、とうとう幹の表面に辿り着きました。すると中から何か浮き上がってきました。

妖精の子どもです。

丸い玉の中に膝を抱えて丸くなり、幹から生まれ出ると、溢れる光に押しやられるようにふわふわ漂っていきます。離れると、玉はふわっと溶け、妖精が目を開き、元気に飛び出しました。

振り返ったクラリスが心の、更に心の目で見ると、妖精の木から次々何百何千という玉が生まれ出て、中から元気に妖精が飛び立っていきます。なんてファンタスティックな光景でしょう。

クラリスは幹に向き直りました。手のひらを当て、じっと木の鼓動に耳を傾けます。

妖精の木の脈打つリズムが感じられます。それと、そのリズムをビンビンと増幅させているものがあります。幹の中にまんべんなく行き渡り、木の血脈となっています。

『これが星の光ね』

クラリスは考え、

『やれるかしら？』

試してみることにしました。

スーッと、幹の中に溶け込んでいきます。

クラリスはビックリして思わず目を開きました。

「妖精の世界って、こうなっていたんだわ・・」

妖精の木の中には、世界が広がっていました。クラリスの見知っている、外の世界です。その外の、人間の世界が、妖精の木の中にすっぽり全部収まっているのです。

その中で、クラリスは行こうと思えばどこにでも行けました。

エメラルドタウンの緑色の屋根のお城、エメラルド城。スーッと屋根を抜け、いました、オーロラ姫です。リラの精とサファイアの精と仲良くお話ししています。「オーロラ姫ー」と呼びましたが、気付いてもらえません。でもお腹の中の子が暴れてオーロラ姫をビ

ックリさせ、みんなで大喜びしました。
　クラリスは今度はカンパニアに行ってみました。一瞬で瞬間移動です。パレスの中で自分の体を捜しました。謁見の間で、なんといつの間にか鏡の周りがついたてで覆われています。「まあなんてことでしょう！」犯人は王妃様でした。クラリスの体はいつの間にか豪華な宝石のブルーのドレスに着替えさせられています。王妃様は上機嫌でクラリスの髪に櫛を入れています。よくよく見れば顔も綺麗にお化粧されています。「まあなんてことでしょう！」ともう一度クラリスは思いました。早く元に戻らなくてはと思っていつものように肉体に精神を同調させましたが、駄目です。どうしてでしょう？
　やはりいったん妖精の国から自分の世界に戻らなくてはならないようです。
　さーて今度はどこに行ってみようかしら？と楽しく考えていると、突然首の後ろを強い力に掴まれて、ものすごい力で引っ張られました。
　あ～れ～・・・
　世界がグングン遠ざかっていきます。視界がまぶしい真っ白な光に覆われ、

「早く戻りなさい。あなたも、妖精になってしまうわよ」

と、すごくはっきりした声で耳元に言われました。
「お母さん？」
　けれど声はそれっきり。クラリスは自分の胸がものすごい勢いで鼓動しているのに気付きました。まるで長い時間水に潜って息を止めていたようです。
　クラリスは自分が危ないところだったのだと気付きました。
「お母さん、ありがとう」
　お礼を言って、今度は慎重に幹の表面から内部を探りました。

妖精の木自身の脈動。
それに呼応し、脈を後押ししているような別のもの・・・。
クラリスは慎重に心を近づけていきました。
心が躍って、楽しい気分が伝わってきます。
『喜んでいる』
そう感じました。
クラリスは心をそっと自分のところへ引き寄せて、妖精の木を離れました。

花のお城の外でダイヤ女王とミラが心配して待っていました。
「お帰りなさい。ずいぶん遅いので心配したわ」
「そうなんですか？」
自分の感覚ではせいぜい２０分くらいしか経っていません。でも妖精の国の時間は一定の速さでは流れていませんから比較のしようがありません。
「向こうの世界へ行っていたんです。妖精というものが世界の象徴だっていうことがよーく分かりました」
二人とも首を傾げました。
「この木の根っこは世界の隅々まで伸びているってことです」

クラリスは観察してきた結果の推察を報告しました。
「降ってきた光は、別の世界の命だと思います」
「別の世界の命？」
二人ともそっくりそのまま繰り返してクラリスの更なる解説を待ちました。
「わたしたちは地球という惑星の上に生きていますね？　わたしたちはこの地球から生まれた命です。体の生き死にというのとは別に、命というものは、最初から、生き物が生まれる前からこの地球に存在していたのではないでしょうか？」

「それは、星の魂ってこと？」
「そうです。わたしたちはその星の魂から自分たちの魂を分けてもらっているんです。
ところが、
せっかくそうして命を持った惑星が生まれても、もし、その惑星に生き物を生み出す前になんらかの原因で惑星が死んでしまったら、その惑星の魂はとても悲しむんじゃないでしょうか？」
「そうねえ。独りぼっちで生まれて死んだら、そりゃあ寂しくて、悲しいでしょうね」
「ですよね？　あの光は、そうして死んでしまった惑星の、命になるはずだった物じゃないでしょうか？と、わたしは感じました」
「なるほどねえ・・・」
ダイヤ女王とミラは腕を組んですっかり感心しました。クラリスは嬉しそうに言いました。
「とっても楽しそうでしたよ、妖精たちを生み出しながら。暗い宇宙をさまよって、こうして生命を生み出せる場所にたどり着いて、嬉しくて仕方ないんでしょうね」
「なるほどなるほど。で？」
「で？」
クラリスは笑顔で首を傾げました。
「で、どうしたらいいの？」
「さあ～？・・・・」
クラリスは笑顔のまま固まりました。ダイヤ女王の笑顔もひくひく引きつっています。
「この事態をどう収めたらいいのかしら～？」
「さあ～～～？・・」
クラリスの笑顔も引きつりました。
「せっかくあんなに楽しそうなんだから、このままにしてあげたら・・」
「へえ～、そお～お？」

ダイヤ女王は意地悪な顔で言いました。
「いいわよおー、こっちは、なんだかんだ言っても同じ妖精の仲間ですからね。ちょっとばかりうるさいのを我慢してあげればいいだけのことだし。でもこの狭い妖精の国にいたのでは退屈でしょうし、どんどん人間の世界への観光旅行を勧めてあげるわよ～？」
「・・・・・」
クラリスの笑顔は完全に固まりました。
「そう来ますか～。完全に人間に丸投げですねえ？」
「だってしょうがないじゃない。まさか妖精の木を切り倒すわけにはいかないし、あの光を追い出すのも無理だし」
「どうして？」
「出来るの？」
「さあ？・・・」
ダイヤ女王もミラもじいっとクラリスを見つめています。
「またわたしですかあ？」
「あなたなら出来る！　よっ、世界一の魔女！」
「おだてたってそうそう良い考えなんて出ませんけれどね」
クラリスは二人の期待でキラキラした瞳をものすごーく迷惑に思いながら考えましたが、やっぱりそうそうアイデアは出てきません。
「やっぱり駄目。わたしいったん帰ります。リラさんに相談してきます・・って、ほんとはこれリラさんに頼むはずだったんですよね？」
ダイヤ女王は残念に思いましたが、心だけのクラリスをいつまでもこちらに引き止めてはおけません。
ダイヤ女王の丁重な謝辞に送られ、クラリスはミラの鏡から元の世界に戻ってきました。

クラリスは目を覚ましました。

暗い天井が見えました。ポッと赤い明かりが灯って、
「お、眠り姫が目を覚ましたぞ」
ヴァイオレットが飛んできました。
「あんた、ずいぶん小っちゃいわね」
「なにィ～」
「ごめんごめん」
あちらで自分と同じ大きさの妖精と会っていたのでただでさえ子どもタイプで小さいヴァイオレットが更に小さく見えます。
クラリスは起き上がって布団をめくって自分の着ているものを見ました。いつの間にやら絹のネグリジェに着替えています。
「ずいぶん王妃様に遊ばれたみたいねえ」
「なんで分かるんだ？」
「わたしお化けになっていたのよ」
「？」
お化けになって戻っていなくたって、すぐに分かります。
「・・お腹空いた」
「おまえ7日間も眠ったままだったんだぞ」
「7日！？」
さすがにクラリスもビックリです。
「さすが妖精の国、あなどれないわね～」
予想していなかったわけではありませんが、こんなに日にちが経っているとは誤算です。というか、
「リラさんかサファイアさんは来た？」
「サファイアなら遊びに来たぞ。ナージャに乗って妖精のチビどもを追いかけ回して喜んでたぞ」
「なにやってんだか。リラさんは？」
「来ないよ。オーロラ姫にくっついてんだろ？」
「あの人もね～」
しっかり者だと思っていたのに、これだから妖精は信用できません。

グー、とお腹が鳴りました。
「7日も食べなかったら飢え死にしちゃうじゃないのよー！？」
さすがのクラリスもムッキー！と癇癪を起こしそうになりましたが、
「お目覚めになりましたね」
ランタンの明かりが近づいてきて、ララベル姫がお茶とサンドイッチをお盆に乗せて運んできてくれました。
「つい先ほどミラからあなたが帰ったと連絡がありまして。まったく妖精というのは呑気で困ります。あなたの眠っている間王妃様があなたのお世話をしてくださって、ハチミツやチョコレートを舐めさせてくださったのですよ」
「それは、お礼を言わなくてはなりませんね」
「おまえ、よだれを垂らして『もっとー』っておねだりしていたんだぞ」
「嘘よお」
クラリスは赤くなってふくれ、ララベル姫が笑いました。
「あなたをここから動かしてはいけないかと思い、ちょっと困りました。周りの国から特使が次々見えられて。なにしろ妖精と言えばここロヴィークですからねえ・・」
ララベル姫はほっとため息をつきました。姫もちょっとお疲れのようです。
そう、ここロヴィーク国が一番妖精との交流が盛んで、妖精のメッカと目されているのです。
クラリスはとにかくお腹が空いているのでサンドイッチをパクついて尋ねました。
「今何時です？」
「夜中の2時です」
「うわあ、変な時間に戻っちゃったわね。ごめんなさい。それで妖精騒動はどうなっています？」
「大騒ぎには慣れました。しょせん子どものイタズラですから」

一番心配された妖精の魔法ですが、新しく生まれた妖精の魔法はそれほど強くないようです。物を魔法で別の物に変えてしまっても、３０分も経てば元に戻ってしまうのでした。
「ところが、やはりずる賢いのは人間の方が一枚上手ですね」
ララベル姫は本当に困ったため息をつきました。
妖精は魔法で物を別の物に変える力があります。その魔法は３０分くらいで効果が切れるようですが、その変えられた物がお金だったりするとたいへんです。
「妖精を手なずける人間が現れたようです。妖精が自分からお金を作り出すとも思えませんし。お店で受け取ったはずのお金がいつの間にか消えてしまって、潰れたクギや屑鉄になっているなんていう事件が、あちこちで起こっています。一人二人のやっていることではありませんね」
ララベル姫はハアーーー・・と深い深いため息をつきました。
クラリスもあくどい人間に腹を立てました。
「やっぱり早くなんとかしないといけませんね」
「そうですね。国の信用にも関わりますし」
他の国にも広がった妖精騒動は、ロヴィーク国のせいにされているようです。とんだ誤解です。
「わたしもう一回寝ます」
クラリスは宣言するとさっそく寝椅子に横になって布団を掛けました。
「オーロラ姫の夢ならすぐに見つけられますから。そこからリラの精を呼びつけてやります。じゃ、おやすみなさーい」
クラリスはあっという間に眠りに入りました。ヴァイオレットがその顔を眺めて呆れて言いました。
「こいつ、あれだけ眠り続けてよくまあ眠れるなあ」
「寝る子は育つ」
と言ってララベル姫は微笑みました。
「この子はふつうの子どもの何十倍もエネルギーを使っているんだ

わ」
「ふうーん」
ヴァイオレットは不思議そうにクラリスを見て、
「しゃーない。あたいが眠りの番をしてやるよ」
と、枕元に座りました。
「頼もしいわね」
ヴァイオレットはエヘヘーと笑いました。内弁慶で人見知りの激しいヴァイオレットですが、ララベル姫はお気に入りです。
二人は優しくクラリスの寝顔を見つめました。

クラリスはオーロラ姫の夢に潜り込みました。オーロラ姫はパステルカラーの野原で天使とたわむれていました。生まれてくる我が子を思い描いているのでしょう。
「オーロラ姫」
呼びかけると、今度はすぐに振り向いて嬉しい笑顔を浮かべました。
「クラリス！　お久しぶりね！　もう！飛んでいったきり戻ってこないんだもの、心配したわよ」
「リラさんたちと楽しくおしゃべりしてたでしょ？」
ちょっとごきげん斜めのクラリスにオーロラ姫はかわいらしく小首を傾げました。
「ごめんなさい、ちょっとリラさんを呼ばせてもらいますね」
クラリスが両手を口にかまえて空を向くと、オーロラ姫も真似をしてつき合ってくれました。
「リラさーん！」
「リラー！」
するとパッと目の前にリラの精が現れました。リラの精は紫の髪に紫の瞳をして、薄い紫の体をしています。クラリスたちと同じサイズでの登場ですが、リラの精はもともと人間の大きさに変身でき

る、特別の能力を持った妖精なのです。
「あらクラリス。妖精の国から戻ったの？」
「はいはい。つい、先ほど、やっと戻ってまいりましたあ」
ごきげん斜めのクラリスにやっぱりリラの精も不思議そうにオーロラ姫と顔を見合わせました。
クラリスは妖精なんか怒ってもしょうがないので、あきらめて妖精の木の光のことを話しました。
リラの精はさすがに興味深そうにフムフムと相づちを打ちながら聞いていました。
「どうしたらいいと思います？」
そうねーとリラの精は考えました。
「自分から出ていってもらうのが一番でしょうけれど」
「ですよねー」
クラリスは直接あの星の命の喜びに触れているので、できたら「やっつける」ようなことはしたくありません。
「お月様にでも移住できないかしら？」
「あれはただの石の固まりよ。そのままでは生き物は住めないわ」
「やっぱり生き物が生きられる環境が必要なんですね・・」
クラリスはウーン・・と悩みました。
「じゃあ海に沈めて、海の妖精を生んでもらったらどうかしら？」
「なるほど、それはいいかもしれないわね。海の中ならいくらでも広さはあるし、魚や海草もいっぱいいるし、退屈しないですむでしょうね」
リラの精は感心しました。けっきょく考えているのはクラリスです。
「その方向で行きましょうか。ではどうしたらその光を海に移動できるか？ですね」
ふと気付くとオーロラ姫は難しい話に退屈してクカーと眠ってしまっています。
「仕方ないわね」

主の眠ってしまった夢の世界にいつまでもおじゃましているわけにもいきません。リラの精は言いました。
「わたしも朝になったらカンパニアに行きましょう。相談はそれから。あなたも、いっつも夜更かししてないでちゃんと眠りなさい。子どもなんだから」
こういう時ばっかり子ども扱いです。でもたしかにクラリスは夜眠ってからもこうして夢の世界をあちらこちらと散歩して歩いて、頭を使いすぎです。
「はあい。おやすみなさい」
「おやすみなさい」

第４章　作戦会議

翌日。お昼近くになってようやくクラリスが目を覚ますと豪華なベッドに寝かされていました。心が妖精の国から帰ってきたので謁見室から王宮の客室に運ばれたのです。王宮は行政機関の入る宮殿パレスの後方に庭を挟んであります。

眠っている間に着替えさせられたり、ハチミツを舐めさせられたり、運ばれたり、女の子の身に恥ずかしい限りです。

起き上がると足元のベッドの下から覗く者があります。

「あら、だあれ？」

クラリスに見つかると大慌てで引っ込みました。

ヴァイオレットが窓のすき間から入ってきました。

「おそよー、眠り姫ー。

あっ、こいつら、また入ってきやがったな！」

ヴァイオレットはベッドの下に火花を飛ばしました。ヴァイオレットの火花はただのこけおどしなので熱くもなんともありません。でもベッドの下に隠れていた者たちはビックリして飛び出してきました。

ピンク、レモン、空色の、３匹の妖精たちでした。

「やったな、チビ助！　そら、お返しだ！」

ヴァイオレットと変わらないような子どもタイプの妖精たちはそれぞれ自分の色の光の玉をヴァイオレット目がけて投げました。

「うひゃあ」

ヴァイオレットはお尻に黄色の玉が当たって悲鳴を上げました。さわやかなレモンの香りがして、クラリスはまたお腹が空いているのに気付きました。

「やったな、えい！」

「やっつけちゃえ！　それそれそれ」

「うわあ、３人いっぺんになんて卑怯だぞお～」

「アッカンベーだ」
クラリスは目の前に繰り広げられる小さな大戦争にへきえきしました。まったく目が覚めた途端にこれです。今日も一日先が思いやられます。
「うわーん、クラリス〜」
けっきょくヴァイオレットがやっつけられてクラリスの後ろに隠れました。全身がピンク、レモン、空色のまだら模様になっています。
「やったー、ざまあみろー」
勝利の雄叫びを上げる3匹に、クラリスはピンと指を弾いて火花を投げつけました。
「へへーん、そんなの怖くないよ〜だ」
火花はボンッと爆発して、3匹はキャーッと弾き飛ばされました。クラリスはパンパンと手を叩きました。
「ハイハイ、おしまい。あなたたち、わたしに何か用？」
3匹は隅の方に固まってじっとクラリスを睨みました。
「おまえお化けなんだろう？」
「あたいたちはお化けを退治に来たんだ」
「お、お化けなんて怖くないぞお〜」
思いっきり怖がって腰が引けています。クラリスはため息をつきました。
「なあに、わたしって妖精たちにまで悪名が轟いているわけ？　こんなにかわいい女の子なのに？」
クラリスは愛想良くニコッと笑ってあげましたが、
「うわあ、ぶりっこして、気持ち悪〜」
「おばさん、無理すんなよ」
「年そーおーでいいんだよ」
とかわいくないことを言いました。クラリスはむっつり指をくるくるすると、風が巻き、3匹を窓の外に放り出しました。キャー。
ヴァイオレットはクラリスの前に出てきて腰に手を当てました。

「まったく近頃のガキどもは」
クラリスはヴァイオレットの黄色いお尻をフッと吹いてやって、ヴァイオレットはうひゃあと飛び上がりました。ちょっとピリピリするようです。
「まったく、しつけがなってないわね」
クラリスはぷりぷり怒りましたが、そりゃそうです、妖精は勝手に生まれてくるだけですから。
クラリスは火花を起こしてヴァイオレットを元の赤色に戻してあげました。
「サンキュー。おお、リラが来てるよ」
「そう。じゃあ行きましょうか」
クラリスは着替えを捜しましたが、フリフリのいっぱい付いたピンクのドレスがハンガーに掛けられているだけで、クラリスは頭が痛くなってしまいました。

クラリスは非常に歩きづらいスカートをつまんで持ち上げながら歩きました。王宮の中もあちこち妖精たちが飛び回り、庭の芝生にも気持ちよさそうにゴロゴロ寝転がっていました。クラリスを見つけると
「あっ、お化けが来た！　アッカンベー」
と集団でやりましたので、クラリスの目はどんどんつり上がって三角になっていきました。
パレスの奥のララベル姫のオフィスに王様と大臣とリラの精が集まっていました。
「おはようクラリス。頭はスッキリした？」
リラがキリッとした顔で言いました。妖精の中でもっとも人間との付き合いが長く、外面はいいのです。今日は人間サイズで紫色のドレスを着て、羽根はしまっています。
「おはようございます、リラさん、ララベル姫、王様、皆さま。わたしはお腹が空いてぜんぜん頭が働きません」

「あらあら。何か持ってこさせましょうね」
ララベル姫がチリリンと鈴を鳴らし、秘書にランチを持ってくるように命じました。クラリスはお礼を言って、リラに訊きました。
「わたしの頭は働きませんから、リラさんのアイデアを是非お聞かせくださいな」
リラは『逃げたな』とちょっとクラリスを睨みましたが、コホンと咳払いするとみんなにも言いました。
「さて。と言うわけで妖精の国の妖精の木からその光を移動させない限り妖精たちは生まれ続けて妖精の国でも皆さんの世界でもたいへんな迷惑になるわけです。
妖精の木から光を取りだし、どこかに移動させる。
わたしはその光を海の中に沈めてしまおうと思います」
そのアイデアはクラリスのものですが、まあいいです。
「ではまずどうやって妖精の木から光を取り出したらいいか？
わたしは、より光を通しやすい、透明のガラスの塔を作って、光がそちらに移りたくなるようにしようと思います」
クラリスはまたサンドイッチを頬張りながらフムフムと頷きました。ヴァイオレットも面白そうなのでクラリスの肩でふわふわの巻き毛に隠れて聞いていました。
「光がそっちに移りたくなるような素敵なガラスの塔ね。誰が作るの？」
「それは、妖精の国に任せましょう」
ララベル姫が魔法の手鏡を構え、その中に銀色の顔、ミラが浮き上がりました。
『了解。ガラス一族に命じて作らせましょう。ああ、ダイヤモンド女王様もいっしょに聞いておられますから、どうぞ続けてください』
クラリスが言いました。
「どんな素敵な塔が出来上がるか楽しみね。それで、その塔をどうやって海の中へ運ぶの？」
「それが問題です」

とリラが難しい顔をしました。
「妖精の木に匹敵するガラスの塔となればかなりの大きさでかなりの重量になると思われます。人間の世界ではせいぜい３０メートルくらいの物だと思いますが」
いえいえ、それだって十分な巨大さです。人間にそれだけの高さの純ガラス製の塔を作る技術なんてありません。
「どうやって妖精の国の外へ運び出すか？　どうやって海まで運んで沈めるか？　難題ですね」
ララベル姫が言いました。
「１立方センチ当たりのガラスの重量を２．４グラムとして、単純に直径１．５メートルで高さ３０メートルの円柱形のガラスの重量を計算すると、７５×７５×３．１４×３０００×２．４／１０００／１０００で、約１２７トンになりますね」
「ひゃくにじゅうなな、とん？・・・」
「体重１００キロの大男が１２７０人ですね」
「ああ・・そう・・」
体重１００キロの男たちが延々肩車をしていって・・、上の方はグラグラ、下の男たちは重さに耐えきれず・・
「作られるの？そんなもの？」
鏡の中のミラから返信がありました。
『それだけの大きさの物になると外の世界から材料を運び込まなければならないそうで、無理だそうです』
「あっそう。じゃ、この案は却下ね」
発案者のリラが早々に投げ出してしまいました。クラリスは塔が見られなくなって残念です。
「じゃあ、どうしようか？」
リラもみんなもクラリスを見ました。クラリスはパクパクサンドイッチをおかわりして食べ続けています。
「おとなのみなひゃん、もっとちゃんと、考えてください」
ララベル姫が苦笑してリラとミラに訊きました。

「そのガラスの塔を、こちらの世界で作ることは可能でしょうか？」
ミラが答えます。
『大量の砂さえあればガラスの精たちがそっちに行って作られると思います』
「砂なんて海に行けばいくらでもあります。その方が都合がいいんじゃありません？」
とララベル姫はリラに訊きました。
「最初からガラスの塔を海に沈めておき、そこに光を誘導する方が簡単なんじゃありません？」
「そうかもね」
リラも頷きました。
「するとけっきょくどうやって光を妖精の木から誘い出すかという問題に戻るけれど？」
クラリスは最後の一口を放り込んでモグモグし、紅茶を一口飲みました。
「大きな鏡を何枚も用意して、妖精の国から海まで光が反射しながら辿っていける道を作れませんか？」
それは鏡の精ミラの仕事です。
『鏡一族を総動員して、本物の鏡を作らなくても空中に鏡の膜を張るのなんてお手のものだわ』
「鏡の一族って何人いるんです？」
『わたしが代表の鏡の精』
と、まずは自分のことを自慢して、
『えーと、長老の銅鏡の精、丸鏡の精、占い鏡の精、あ、水鏡の精、えーと、ガラス鏡の精に、姿見の精、大鏡の精、手鏡の精、変わり者の万華鏡の精に、マジックミラーの精、合わせ鏡の精・・は欠番ね。と、そんなところかしら？』
ララベル姫が指折り数えて、
「１１人ですか。出来そうですか？」
と、これはリラに訊きました。

「海って、どこの海？」
「やはり、ノール海でしょうか？」
ここ北の大陸と南の大陸の間の閉じた内海です。
「そうね。ちょっと距離があるけれど」
妖精の国はロヴィークの南に広がる黒い森のどこかにあると言われています。内海ノール海までは３つ国を越えていかなければなりません。
「そこは鏡一族の腕の見せ所かしら？」
リラの挑戦的な言葉に自尊心の高いミラは
『任せなさい』
と鼻を反らせました。
「ところで、問題ない？」
とリラはララベル姫と王様に尋ねました。
「出来るとして」
と、クラリスを見て、クラリスは自信ありげに微笑んでいます。きっともう頭の中でいろいろ計算しているのでしょう。
「ノール海に勝手に星の光を沈めちゃって、周りの国々ともめません？」
王様は困った顔をしてララベル姫を見ました。ララベル姫もうーんと考えて、
「やはりまずいでしょうから、こっそりやりましょう」
と言いました。
「広いノール海です。場所を選べば気付かれることはないでしょう」
何しろ緊急事態です、許してもらいましょう。妖精たちは増え続け、ロヴィーク国はすでに妖精たちに占領されてしまったようなものです。
「じゃあ、やりましょう？」
とクラリスは言いました。リラもララベル姫もミラも、王様も大臣たちも、うなずきました。
ヴァイオレットがクラリスの耳に

「えへへ、面白そうだな」
と囁きました。栄養補給されたクラリスの頭脳もやる気満々です。

第5章　ある妖精のお話

ロヴィーク国の南に黒い森と呼ばれる妖精の国があるという大きな森が広がっています。
その黒い森の中でロヴィークはとなりの国ローゼンヌと国境を接しています。
黒い森のローゼンヌ側のほとりに住む一人の少女のお話。

少女は名をアロアと言いました。８歳の女の子です。お父さんは木こりで、お母さんは農家のお手伝いをしていて、一家は森のほとりの小屋に木こり仲間の家族数軒でかたまって住んでいました。
３日前のことです。アロアは昼間お母さんについていって農家の子どもたちの子守をしてやっていました。夕方小屋に帰ってきて、たきぎのたき付け用の小枝を拾いに森の入り口に入りました。
すると高い木の枝に緑色に光る物がありました。葉っぱに日の光が透けているのかと思いましたが、他の葉っぱはもう黒く影になっています。
アロアはよく見ようとして近づいて、近づくと停まっている木の枝が邪魔になって、うーんと背を反らしたらひっくり返って尻餅をつきました。
ボキッという小枝の折れる音に気付いて緑色の光が下を覗き込みました。
緑色に光っている、それは一匹の妖精でした。
アロアはパアッと喜びを浮かべて言いました。
「アリョーカ姉ちゃん！　お帰りなさい！」
妖精はじっとアロアを見下ろしたままです。アロアは
「下りてきてよ。遠くてよく見えないよ」
と呼びかけました。すると妖精は仕方ないなあという感じで立ち上がり、緑色の光の粉を叩きながら飛んできました。

「うわあ綺麗！　すっごく綺麗だよ、アリョーカ姉ちゃん！」
アロアは手を叩いて喜びました。アロアの顔の前まで飛んできた妖精はアロアをじいっと見つめて訊きました。
「あんた、馬鹿？」
喜んでいたアロアはムッとしました。
「ひどいなあアリョーカ姉ちゃん。あたし馬鹿じゃないよお」
「だからさあ、なんであたしがあんたの姉ちゃんなの？　あんた人間でしょ？　あたしは見ての通り妖精だよ」
「だからあ、お姉ちゃん、妖精になったんでしょ？」
「？」
アロアはもどかしそうに妖精に言いました。
「母ちゃんが言ったんだよ、アリョーカ姉ちゃんがいなくなっちゃってから、お姉ちゃんは妖精の女王様に呼ばれて妖精の国に行って、妖精になったんだ、って」
アロアの姉のアリョーカは冬の間に悪い病気にかかって亡くなってしまい、病気が移るのを恐れて火葬にされたのです。姉とととても仲の良かったアリョーカには母親がそう言って慰めていたのでした。
アロアの話を聞いて妖精は考えました。
「そうなんだ、あたしはあんたのお姉ちゃんだったんだ？」
アロアは大喜びで言いました。
「そうだよ！　お帰りなさい、アリョーカ姉ちゃん！」
アロアは妖精の小さな手を指先で掴んで小屋の方に引っ張っていきました。
「お母ちゃーん！　アリョーカ姉ちゃんが帰ってきたよー！！」
妖精を見た母親はビックリしました。気味悪く思いましたがアロアがあんまり嬉しそうなので、つい、
「おお、アリョーカや。お帰り」
と言ってしまいました。
父親が森から仲間たちと帰ってきて、妖精を見るとこれまたビッ

クリしました。でも母親があらかじめ耳打ちしておいたので
「お帰り」
とぎこちなくですが言いました。
「ふうーん、本当にあたしはアリョーカなんだ」
と、緑の妖精は自分が人間のアリョーカの生まれ変わりだと納得してしまいました。
ところで森の中に居た父親は森の中で別の妖精たちを目撃し、木こり仲間の情報網でロヴィークの妖精騒動を多少ながら知っていました。
父親は母親にこっそりそのことを話しました。二人ともどうしたものかと思いましたが、アロアは大喜びですし、妖精も小屋の中を物珍しそうに眺めているだけで別に悪さをする様子もないので放っておくことにしました。
そう、他の妖精なら大喜びでイタズラして大騒ぎするところでしょうが、この妖精は大人しく、ちょっと変わった妖精のようです。

緑の妖精はアリョーカになってしまいましたが、翌日になると他の妖精たちも森から出てきて、近くの村や町、もっと遠くの大きな街にまで集団で飛んでいきました。
アロアはいつものようにお母さんといっしょに農家の手伝いに出かけ、子どもたちの子守をして、妖精のアリョーカもついてきていました。アロアは空を飛んでいくたくさんの妖精たちを眺め、アリョーカに
「お姉ちゃんが連れてきたの？」
と訊きました。妖精アリョーカは、
「知らない。あいつらうるさいからあたしは誰も来ない方に来ただけよ」
と言いました。子どもたちの中にはアロアより年上の子もいて、
「それ妖精でしょ？　妖精がアリョーカなんて馬鹿みたい」
と意地悪なことを言いました。アロアは怒って

「アリョーカ姉ちゃんだもん！」
と言い張りました。子どもたちは年上の子といっしょになって
「アロアのバーカ。やーい、妖精のお姉ちゃんー」
とからかいました。アロアは悔しくて涙を浮かべました。すると妖精アリョーカはその涙をすくってフッと緑色の光を吹きかけました。すると涙の一粒が緑色に輝く宝石のように固まりました。
「口開けな」
アロアが口を開くと妖精はそのエメラルドを放り込みました。
「・・甘い」
ほんのり砂糖の甘さがして、花の香りが広がりました。
甘いと聞いて他の子どもたちはうらやましがりました。妖精は言いました。
「葉っぱをきれいな水で濡らしてきな。あんたらにも飴を作ってやるよ。ただし、妹をいじめる奴には作ってやらないよ」
みんな魔法の飴がなめたくてごめんなさいとアロアに頭を下げて、大急ぎで葉っぱを取りに走りました。
アロアは妖精にニッコリ笑いました。自分を妹と呼んでくれたことが嬉しくて仕方なかったのです。
ところが、アリョーカを見つけて他の妖精たちが寄ってきました。
「ねえあんた。こんな田舎にいないで街に遊びに行こうよ。街にはもっと人間がいっぱいいて、おしゃれなお店がいっぱいあって、美味しい物がいーっぱいあるんだって」
アリョーカは言いました。
「あたしはいいよ。あたしはこの子が気に入ったんだ」
妖精たちはアロアを不思議そうに見ました。
「こんな人間の子ども、どこにでもいるじゃない？」
アリョーカは言い返しました。
「ええ。あんたたちみたいな妖精も見飽きてうんざりだわ」
妖精たちは驚き、ムッとして、
「行こう。変な奴」

と飛び立ちましたが、去り際に「えい」とアロアに赤い光を投げつけました。光はアロアのおでこに当たり、
「熱い！」
とアロアを驚かせました。ちょっぴり熱かっただけなのですが、とにかくビックリしてしまったのです。
アリョーカは怒りました。緑の光を投げつけると、妖精たちの背中の羽根はみんな緑の葉っぱに変わってしまい、飛ぶことができなくなり、地面に落ちると悲鳴を上げて走って逃げていきました。
「だいじょうぶかい？」
アリョーカにおでこをフーッと吹いてもらうと冷たい風が起こっておでこに付いた赤色もすぐに消えました。
「ありがとう。アリョーカ姉ちゃんは強いんだね！」
「そうみたいね」
アリョーカも自分が強いなんて知りませんでした。彼女にとってはどうでもいいことでしたが。
子どもたちが葉っぱを濡らして走ってきて、アリョーカは約束通りみんなにエメラルドの飴を作ってやりました。

翌日になると森を越えてやって来る妖精の数はどんどん増えて、秋のトンボの大群衆のように空を埋めるようになりました。街の方から妖精の被害の噂も聞こえてくるようになりました。
あんまりたくさんの妖精を見て、アロアはちょっと心配になりました。
「ねえ、アリョーカ姉ちゃんは、あたしのお姉ちゃんだよね？」
アリョーカは妖精の群れを眺めながら言いました。
「ああ。そうなんだろう。たぶんね」
そうだと言い切ってくれないのでアロアはまだちょっと心配です。それに気付いてアリョーカは言いました。
「妖精ってのはね、ただの妖精なんだ。あたしもそうだった。でもあんたがあたしを見つけてアリョーカって名前を付けて、あたしは

アリョーカっていう妖精になったのさ。あたしはアリョーカの精なのさ。だから、あたしはアリョーカで、あんたのお姉ちゃんさ」
アロアは難しい理屈は分かりませんでしたが、とにかく安心して、ニッコリしました。
アロアは妖精のアリョーカ姉ちゃんが大好きでした。

お話をロヴィークに戻って。
クラリスはリラの精とヴァイオレットを肩に乗せ、自分はペガサスナージャにまたがり、ノール海に向かって出発しました。
妖精の国からガラスの精一族と、連絡係に大鏡の精と、追加で海の精とイルカの精がノール海に向かっています。
リラがクラリスに訊きました。
「イルカの精って、なんで？」
「イルカに海の人間になってもらおうと思うんです」
クラリスは自信満々で自分の計画を話しました。
「考えたんですけど、星の光を海に沈めてもまた同じように海の中に妖精みたいな物を大量発生させられたらやっぱり大迷惑ですよね？　ですから、ちゃんとした生き物、海の人間を生み出させてはどうかと思うんです」
「ちゃんとした生き物、ねえ？　妖精みたいなデタラメじゃなく？」
リラの皮肉っぽい言葉にクラリスも苦笑しました。
「生み出した生き物が自分たちの文化を持って、発展していったら、少ない数でも命を生み出した感動は大きいものになるんじゃありません？」
「なるほど、それは見ていて楽しいでしょうね」
「でしょう？」
クラリスは得意そうにニッコリしました。
「それで、星の光にイルカを海の人間にさせるの？」
「ええ。海で一番頭のいい生き物ってイルカでしょ？」

というのはオーロラ姫から借りた物の本で読んだだけで、実際のところクラリスはイルカを見たこともありませんし、そもそも海に行くのも初めてです。
「出来るの？」
「はい。出来ると思いますよ」
クラリスはますます得意げに言いました。
リラはうなずきました。
「そう。そうね、イルカは妥当な選択だとは思うけれど・・、はたして上手くいくかしらねえ？」
「どうしてです？」
「それは・・イルカに会ってみれば分かるわ」
クラリスは首を傾げました。本によるとイルカはとても頭が良く、人間にも友好的な動物とありました。いったい何が問題なのでしょう？

ナージャの足は速いですがそれでも、ロヴィークのカンパニアから一番近いローゼンヌのノール海岸部まで５００キロメートルはあります、軽く一っ飛びというわけにはいきません。黒い森の中のローゼンヌとの国境を越えると、森の向こうに山々の連なりが見えてきました。
「あれをこれから越えるのはきついんじゃない？　森を越えたら今日は早めに宿を取ったら？」
クラリスはリラの忠告にうなずきました。
「どこか心当たりはあります？」
「しばらく行けばじきに宿屋町があるはずよ」
森を走る街道に沿ってナージャを駆けさせました。
「頑張ってね。もう少しよ」
もう少しで森を越えようかというところで、突然ワッとさまざまな小さな光の膜が立ち上がって前方の空をふさぎました。
妖精たちの大集団です。

「まーた、なんなのよ？」
妖精たちの攻撃的なオーラにクラリスは顔をしかめました。なんだかすっかり目を付けられてしまっているようです。
「えいめんどくさい。ナージャ、行くわよ」
クラリスはかまわず強行突破しようとしましたが、
「大砲かまえ～～、どおん！」
妖精たちがいっせいに叫んでいっせいに攻撃の光を放ちました。しかも何人かでグループになって光を束ね、まるで光の砲弾のように大きな強力な光玉を放ってきます。クラリスは慌てて緑色のバリアを張りましたが、
ドドドドドン！！！
と、何十発もの光の砲弾がぶつかって、衝撃でナージャはヒヒーンといななき立ち往生しました。
「それー！」と森の木々から隠れていた妖精の群れが飛び立ち、横から後ろから、同じように光の砲弾を撃ち込んできます。クラリスは球形バリアの強度を上げ、なんとかナージャに逃げ道を捜してもらいましたが、とにかく妖精の数が多く、砲弾の威力もたいしたもので、ドン、ドン、とバリアごとあっちこっちに弾かれて、ナージャも怯えて冷静さを失いました。
「行けー！　お化け魔女をやっつけろおー！」
妖精たちはツタで編んだ網を持ってバリアに投げかけ、二重三重に捕らえると、網から伸びたつなに大勢で捕まり、
「せーの！」
いっせいに魔力を放出しました。バリアにビリビリ衝撃が走り、内部に放電し、ナージャはいななき、ヴァイオレットはひい～と悲鳴を上げてクラリスの髪に逃げ込みました。
「ちょっとクラリス。なんとかなるんでしょうね？」
「そりゃあなんとでもなるけど」

リラに言われ、クラリスは自分たちを包囲して得意になって攻撃してくる妖精どもを見渡して非常に困りました。
「待ち伏せして集団で襲ってくるなんて、こんな頭があったなんて意外だわ」
「悪ガキの頭脳はあるのよ。どうするのよ？」
「ここまでやるとは思わなかったわ。反撃すればケガをさせちゃうわ」
妖精たちはますます得意に、つなをブンブン振ってバリアを振り回し、木にバンバン打ち付けました。
「うわ～ん、バカ、クラリス～、そんなこと言ってる場合かあ～！」
ヴァイオレットが悲鳴を上げ、
「そうよ。さっさとお仕置きしてやりなさい」
リラに言われ、クラリスもしょうがないと覚悟しました。
緑色だったバリアがピンクに、赤く、真っ赤に強い光を放ち、ブーーーン・・と空気を振るわせました。
「負けるな！　行けー！」
負けじと魔力を強める妖精たちに、
「ああん、馬鹿。もう知らないわよ！」
クラリスが一気にバリアを解放、爆発させようとすると、
妖精たちの背後でざあーっと緑の風が巻き上がり、風に煽られた妖精たちがわーっと地上に落下していきました。風は次々巻き上がり、妖精たちは次々落下していきました。
クラリスはチャンスと光の剣で網を切り破り、ナージャを脱出させました。
「こうらっ、あんたたち！　許さないわよっ！」
クラリスがぐるんと腕を回すと猛烈な風の渦が生まれ、ぐるんと３６０度旋回して妖精たちを巻き込み、ゴオッと遠くに飛んでいきました。キャー・・と妖精たちの悲鳴が遠のいていきます。
「さあてと、命の恩人さんはいっしょに飛ばされてないでしょうね？」

クラリスはナージャを緑の風の巻き上がった辺りに向かわせました。
原っぱに一人の女の子が立っていました。
後ろ手に何か隠しています。
ナージャはヒラリと女の子の前に降り立ち、女の子は煽られるように一歩後退しました。
「こんにちは。命の恩人にお礼を言わせてちょうだいな」
心配そうな女の子の頭の上にひょいと緑色の妖精が背中から飛び上がりました。
「へー、やっぱりあんた強かったんだ？」
「そういうあなたも大した魔力ね？　仲間たちが傷つけられないようにいさめてくれたんでしょう？」
緑の風に背中の羽根を葉っぱに変えられた妖精たちが葉っぱを重そうに地面に引きずりながらよたよた逃げていきました。「ちくしょう、覚えてろよー！」なんて言ってます。
「わたしはクラリス。こっちがリラの精さんで、こっちがヴァイオレット。これがナージャよ」
「あたしはアリョーカ。これは妹のアロア」
「妹？」
「ああ。あたしはアロアの姉の妖精なのさ」
勘のいいクラリスはすぐになるほどと納得しました。勘の悪いヴァイオレットは変なのーと言ってます。
「それにしてもあなた、本当に大した力ね？　星から生まれた妖精さんよね？」
クラリスは不思議に思いました。こんなに強い魔力を持つ星の妖精は彼女一人です。
「何故かしら？」
「さあねえ？　自分が何者かなんて、自分に分かるものですか」
アリョーカはどうやらとてもクールな妖精のようです。
クラリスは嬉しくなってニッコリしました。

「あなたはわたしの先生に似ているわね。どうぞよろしく」
アリョーカが褒められたのでアロアも嬉しくてニッコリしました。
「お姉ちゃん、このお馬さん、天馬だよねえ？　綺麗だねえー」
ナージャも褒められたのでサービスに顔を近づけてやりました。
アロアは喜んで頬やたてがみを撫でました。
クラリスは二人ともっとお話ししたくて頼みました。
「一晩ベッドを一つ貸してくれないかしら？　お礼はするから」
クラリスはポシェットの財布から銀貨を一枚取り出しました。
「ロヴィークのお金だけど、いいかしら？」
「うわあー、銀貨だあ！」
アロアはピカピカの銀貨を珍しそうに眺めました。オーロラ姫の相談役というか妹分のクラリスはけっこうなお金持ちなのです。
「うん！　いいよ！」
交渉成立。今夜の宿が決まりました。
クラリスはアロアをナージャに乗せてやって、フワリと浮かんでアロアの小屋に向かいました。

さて。
吹き飛ばされ、逃げていった妖精の群れですが、遠くからこのケンカの一部始終を観察していた別の妖精グループがありました。
彼女たちはふてぶてしく笑うと山の方へ飛んでいきました。

第6章　悪い妖精たち

翌日クラリスたちはアロアたちと名残を惜しんで別れ、ノール海向かって出発しました。昨夜はアリョーカといろいろ話したかったのですが彼女はあまりしゃべってくれず、もっぱらクラリスのオーロラ姫とのお城の生活と、ヴァイオレットの冒険の自慢話で終わりました。人見知りの激しいヴァイオレットはいったん慣れると甘えん坊の内弁慶になるのです。アリョーカはまだ生まれたばかりでありしゃべられることもないのでしょう。

町を一つ越えると山々が2列になって連なっています。間をロヴィークまで続く街道が走っているのですが、一応秘密の旅なので目立たぬように山脈の街道と反対側を飛んでいきました。

しばらくするとクラリスは嫌な気配を感じて注意を向けました。あんのじょう山の木々の間から青い光の玉がビュンと飛んできました。今度は余裕を持ってヒラリとかわしました。しかし青い球はビュン、ビュン、と続けて飛んできました。

「こらあ、姿を現しなさい！」

またビュンと飛んできたのでクラリスもお返しに火花を投げつけてやりました。木々の間でパッと小さく赤い光が散り、青い光は収まりました。

「まったくもー」

とクラリスが頬をふくらませていると、

「危ない！」

リラの警告でクラリスはハッと振り返り、危うく風の刃を避けました。

ビュッ、ビュッ、と、今度は至近距離から次々鋭い刃が襲ってきます。クラリスも風を起こして相手の刃を消し去りました。

「誰！？」

風を起こしている相手を捜すと、それ自体風のようにビュンビュ

ン高速で飛び回る白い妖精を見つけました。
真っ昼間で高速で白いので見つけづらいったらありません。
「チッ」
クラリスはイライラしてついお行儀悪く舌打ちしました。
神経を集中して鋭くしていきます。ようやく動きを捕らえたと思うと、
「危ない！」
今度はまた山の斜面から青い光の球が飛んできます。危うく避けると今度はまた風の刃が鋭く襲ってきます。まったく見事な連係攻撃です。
「ナージャ！」
クラリスは指さして山に突進させました。やり易い相手から片付けるのです。
頭上に恐ろしい殺気を感じて慌ててナージャを避けさせました。危うく赤く灼熱する光の矢がまっすぐ地上に飛んでいきました。見上げるとまた素早く赤い影が日の中を移動して、と思えばまた青い光の球が飛んできて、風の刃が飛んできて、クラリスはたまらずナージャの翼に頼って遠く逃げ出しました。
しかし白色の光がものすごい勢いで追い越していったかと思ったらパッと赤青白黄色に散って、ナージャの目の前にカッと稲妻の網が広がりました。ナージャがいななき、クラリスは結局また球形バリアを張って空中にとどまり守りに徹しました。
「なんなのよこの妖精たち？　無茶苦茶強いじゃない？」
昨日のアリョーカといい、どうやらクラリスたちの星の妖精に対する考えは間違っていたようです。この妖精たちは一人一人がすごく強い魔力を持っています。もちろん力だけならクラリスの方が遙かに強いですが、彼女たちは連係して、何故かひどく戦い慣れています。細かい動きでは大きなナージャを圧倒し、どうやら合体して長距離も超高速で飛べるようです。
クラリスはついリラに八つ当たりしました。

「妖精の国にこんな攻撃的で強い妖精がいる！？」
この戦い慣れは生まれてほんの数日の子どものできることではないでしょう？
「強い妖精ならいるわよ、剣の精とか弓矢の精とか。でもこんなに本気で人を襲うような怖い妖精はいないわよ」
リラの精もこの攻撃性に戸惑っています。立ち往生のクラリスとナージャに４人組の妖精軍団は高速でガンガン容赦ない魔力攻撃をしてきます。ナージャは怯えてブルブル震え、ヴァイオレットもクラリスの髪の毛の中で泣きべそをかいています。
クラリスの目つきが変わりました。
「ナージャ。ちょっと頑張ってね」
クラリスはバリアを操り先端を尖らせました。
「ゴー！」
後方に魔力を解放し、バリアごと巨大な槍となってもの凄いスピードで発進しました。４匹は風圧にキリキリ舞いし、魔力の余波に捕まってジタバタしました。クラリスはぬかりなくそれを見てニヤリとしました。
「なるほど、そういう使い方もあるんだ」
クラリスは槍の向きを変え、魔力を回転させて風の渦で大気にトンネルを開け、ゴッと音速を超える猛ダッシュで４匹の間をすり抜けました。４匹はまたくるくる回転し、網状に散った魔力の余波に捕らわれジタバタしました。
クラリスはバリアを解き、４匹と向き合いました。
「ち、ちっくしょおー・・」
４匹は目を回しながらそれでも攻撃的な目つきでクラリスを睨みました。
クラリスも睨みました。
「わたしが怒っているのは分かるわね？」
４匹の攻撃的なオーラが揺らぎました。４匹は寒気を感じて不安そうに周りをキョロキョロしました。空間がゆらゆら揺れ、黒い陰

が現れました。厚い布に覆われ、徐々にくるまれ、締め付けられていくような息苦しさに妖精たちは恐怖しました。
「わ、や、やめろ・・」
クラリスは怖い顔で言いました。
「あなたたち、本気でわたしを殺すつもりだったでしょう？」
「だ、だって・・」
「だって、なによ？」
「だって・・・」
妖精たちは顔を歪ませ、泣きべそをかきました。
ググッと、黒い陰が４匹を締め付けました。
「いやーっ、たすけてーっ！！」
「なあ、クラリスう・・」
ヴァイオレットが怖そうに遠慮がちにクラリスに言いました。クラリスはフッと息をつきました。
「ま、これくらいにしてあげましょうか」
パッと明るい陽光が戻ってきて、解放された４匹はハアッハアッと大きく息をしました。慌てて逃げようとして、
「待ちなさい！」
クラリスに叱られました。
「まったく、妖精がこんな凶暴なものとは思ってもみなかったわ。答えなさい。どうしてわたしたちを殺そうとしたの？」
４匹のリーダーらしき白い妖精がおずおずと言いました。
「その白い馬が欲しかったんだ。それにはあんたが邪魔だから」
「ナージャが？」
ナージャはフンと４匹から顔を逸らしました。
「まあ欲しい気持ちは分かるけれど、でもそれだけじゃあ・・。そうよ、あんたたちどうしてそんなに強いのよ？　そんな戦い方、どこで覚えたの？」
４匹は顔を見合わせ、白いのが言いました。
「面白い人間たちに会って、そいつらと友だちになったんだ」

「どんな人間たちよ？」
「山賊って言うんだって」
クラリスは納得がいって呆れ返りました。
「あんたたちねー、友だちはよーく選ばなくちゃ駄目よ。そいつらにどんなことを言われたの？」
「いっしょに馬鹿なやつらをやっつけてお宝をいただこうって」
「馬鹿はあなたたちです。で、あなたたち、それを素直に真に受けたの？」
「だって、楽しそうで、いい奴らだったんだもん」
クラリスはフウンと言ってむっつり不機嫌な顔になりました。
「人を襲って手に入れた食べ物やお酒で愉快に楽しく酒盛りしてたのね。そりゃあそういう馬鹿騒ぎはあなたたち妖精は大好きでしょうね」
４匹はすっかり反省しているようですが、クラリスは困ったものだと思いながら、もっと深刻な心配をしました。
「ねえ、リラさん。どう思います？」
「フウン。どうやら星の妖精は接触した人間の影響をすごく強く受けるようね」
「そのようですねえ・・」
純粋で優しいアロアと出会ったアリョーカは優しく、人や仲間を守るための強い力を得ました。
悪党の山賊たちと出会ったこの４匹は自分勝手で、欲望が強い、人殺しさえなんとも思わないような凶暴な力を持ってしまいました。
「そういえばララベル姫が人間にそそのかされて金銀を作り出す妖精のことを言っていたわ」
アリョーカや４匹の他にまだまだ人間と接触して強い影響を受けてしまった妖精たちがいるようです。
「どうなるのかしら？」
これから星の光を移動して妖精が生まれなくなっても、すでに生まれてしまった妖精たちはどう暮らしていくのでしょう？

「とにかく急ぐのね」
とリラに他人事のように言われてクラリスはムッとしました。なんにも役に立ってくれないんだから。ヴァイオレットといっしょじゃないですか。
「急ぎますよ～だ。でもその前に」
クラリスはギロリと４匹の妖精を睨み、４匹は震え上がりました。さっきのクラリスの魔法がよほど怖かったようです。
「あなたたち。自分のことは自分で後始末つけてもらうわよ」

山賊たちは洞穴の中に盗んだ絨毯を敷き、アジトにしていました。奥には盗んだ金銀財宝、服や布が宝箱から溢れています。
アジトの山賊たちは7名。みんな垢焼けした赤黒い顔にもじゃもじゃひげを生やし、いかにも悪そうな面構えをしています。他3名が周囲に見張りに散らばり、3名が獲物を求めて偵察に出ています。
偵察の一人が間違って細い旧道を上ってくる馬子を見つけました。馬子はまだ子どもで、馬は真っ白な上等の毛並みをして何やらぎっしり詰まったわら袋を背負ってます。
偵察はコーンコーンと鹿の鳴き真似をして仲間に合図を送りました。アジトの方でも合図を受けて狩り場に急行しました。
誰も通らない細い道を一人で上ってきて、まったく馬鹿な子どもです。ひときわ体の大きい頭領は舌なめずりして馬子の前に飛び出しました。
「おい坊主。命がおしけりゃ馬と荷物を置いてさっさと引き返せ」
手下どももニヤニヤ笑って前後から馬子を取り囲みました。馬子は頭巾をかぶった顔を上げるとアッカンベーと舌を出しました。頭領は呆気にとられ、猛烈に怒りました。
「なめんじゃねえぞ！　無くしちまってから命の大切さを思い知っても手遅れだぞ！」
大きな刃の刀をギラリと抜き放ち、馬鹿な子どもに見せました。

山賊たちはゲタゲタ笑いましたが、馬子の方もアハハハハと笑いました。山賊どもはまたギョッとしました。
「女か？　おいおいお嬢ちゃん、いってえどういうつもりだ？」
わざわざ山賊にさらわれに来るような娘もいないでしょう、山賊たちは怪しく思って周りをキョロキョロしました。すると、「ギャッ」と一人が悲鳴を上げてブスブス黒い煙を上げながら倒れました。
「ヒッ」と一人が悲鳴を上げたかと思うと服がビリビリに破けて素っ裸で縮こまりました。
「いやーん、もう！」
クラリスは赤くなって顔を逸らしました。
「ほら、さっさとやっつけちゃって！」
木の上から４匹の妖精が下りてきました。山賊たちはビックリです。
「こら、チビども！　友だちを裏切るのか？」
「うるさい悪者！　よくもあたしたちをだましたな！」
「なんにもだましてねえだろうが！？」
頭領は心底心外そうに叫びました。
「おまえら俺たちの武勇伝を聞いて大喜びして、いっしょに酒を飲んで愉快に盛り上がって、自分から俺たちの仲間にしてくれって言ったんじゃねえかよ！？」
クラリスは白い目でジロリと４匹を睨みました。４匹は慌てて、
「うるさいうるさいうるさい！　酔っぱらってそんなのは覚えてなーい！」
と言い訳して、
「えいっ！」
と、ひどいことに昨日の仲間を裏切って雷や熱や冷気や風を浴びせかけました。
「イテイテ！　こらあ裏切り者お～！　なんてひどい奴らだ！！」
クラリスは呆れて
「もういいわ」

と４匹を止めると、手近のツタを魔法の指で操って、くるくると器用に山賊たち全員を縛り上げてしまいました。山賊たちはまったく手も足も出ず、
「ウ～ム、恐ろしい魔女だ」
と降参しました。まったく拍子抜けです。
「ほらあんたたち、この人たちを町の警察署に届けてきなさい」
「ケイサツショってなんだあ？」
「町で立派な偉そうな建物に届ければいいのよ。わたしたちは先を急ぐから、じゃあね」
クラリスはパッと紺色のドレス姿に変身し、肩にはちょこんとリラとヴァイオレットが乗っています。ナージャの背中の荷物も消えて、全部クラリスお得意の幻術です。
ナージャが魔法の翼を広げると山賊どもはほおと捕まっているのも忘れて感心しました。その間抜けな顔にあの４匹の先生ですからもっと恐ろしい人間を想像していたクラリスはまたも呆れ返りました。
「あなたたちも、あんたたちも！」
４匹を睨んで、
「心を入れ替えてまっとうに生きるのよ」
子どもにお説教させないでよ、と情けなく思いながらクラリスはナージャにまたがって飛び立ちました。
ヴァイオレットが訊きました。
「なあクラリス。あの妖精たちちゃんと山賊たちを警察に連れていくかな？」
リラも言いました。
「そうね。また言いくるめられて仲間に戻りそうね？」
クラリスは、
「あー、聞きたくない！　妖精のお守りなんてもうウンザリよ！」
と言いました。

心配された４匹ですが。
魔力で小突きながら山賊ども１３名をふもと目指して歩かせていました。
頭領は嘆きました。
「ちくしょう、俺たちの冒険もここまでか。一旗揚げようと田舎から出てきて、ここまで頑張ってきたのになあ。兄弟どもよ、首落とされてあの世に行っても、地獄でまたいっしょに暴れてやろうぜ」
手下どももおいおい泣いて言いました。
「ああ、楽しかったなあ。お頭あ、俺は自分の人生に悔いはねえぜ」
「そうよそうよ。太く短く、俺たちゃあつまらねえ人生をせいいっぱい生きてやったぜ」
「お頭あ～、俺はまだ死にたくねえよ～。俺は稼ぐだけ稼いだら山賊なんか足を洗って、かわいい女房見つけて畑耕してのんびり平和に生きていきたかったんでえ～い」
「うおーんうおーん」
「泣くな、言うな。これが俺たち悪党の末路よ。まっとうな人様の夢を見るんじゃねえや。俺たちにゃあ許されねえ夢のまた夢よ」
「うおーん、うおーん」
「うわ～ん、うわ～ん」
山賊たちの泣き言を聞かされているうちに案の定妖精たちは山賊たちに同情してきました。
「おまえら警察ってところに突き出したら、殺されちゃうのか？」
「そうだぞー、首をでっけえ刀で、チョン、だ」
「ふうーん。死にたくないか？」
「そりゃあ死にたくねえさ。俺たちゃあ、たしっかに、悪党だよ。だがな、人を殺したこたあねえ。まあ、聞き分けのねえ野郎をぶん殴るくらいで、殺しちゃいねえよ。だがなあ、お上はそんな言い訳聞いちゃあくれねえよ。あーあ・・、俺たちゃ殺されなきゃならねえほど悪いことしたのかなあ・・」

ハアーーー・・と、頭領は深く深くため息をつきました。
４匹の妖精たちは集まって相談を始めました。リラが心配した通りです。
この山賊たち、神妙ななりをしていますが、クラリスは４匹の妖精たちにはっきりした恐ろしい殺意を感じたのです、その４匹に影響を与えた山賊たちが、はたして本当にそんな殊勝な心根をしているのでしょうか？
さすがの４匹も山賊を助けてやるかどうか、なかなか結論が出ません。その様子を見て頭領が言いました。
「なあおまえら、俺たちと友だちだったよなあ？　そういやおめえら、名前がなかっただろう？　今生の別れだ、俺に名前を付けさせてくれよ。そうさなあ、どんな名前がいいか？　やっぱりかっこいいやつがいいよなあ・・」
かっこいい名前と聞いて４匹は興味津々です。
「白い奴。おめえは風の使い手だ。白い刃、バイスメッサーだ」
「バイスメッサー」
なんだかすごくかっこいい名前に白い妖精はニヤニヤしました。
「黄色い奴。おまえは雷を操るから、ゲルブサンダーだ」
「ゲルブサンダー」
黄色い妖精も悦に入っています。
「赤い奴。おまえは矢だから、ロートフェイルだ」
「ロートフェイル」
赤い妖精はフフンとほくそ笑みました。青い妖精も待ち切れません。
「青い奴。おまえは氷だから、ブローエイスだ」
「ブローエイス」
嬉しくてたまりません。
頭領はハアーとまたため息をつきました。
「その名前を形見におめえらは立派に生きていってくれ。俺たちの分もなあ」

手下どもはオイオイ泣きました。４匹の妖精はその様子を見て実に快く言いました。
「いいぞ。仲直りだ。おまえたちを警察に連れていくのはやめた」
「ほ、本当か！？」
「うん。そら」
白い妖精、バイスメッサーが風の刃で１３人のつなをみんな切ってやりました。山賊たちは歓声を上げました。
「おおっ、ありがとうよ！　やっぱりおめえら気のいい最高の友だちだ！
改めて紹介させてもらうぜ。俺は山賊のバーバロッチだ。これからもよろしくな、小さな親友たち！」
「おう！　よろしくな！」
と、こうして４匹の妖精はバーバロッチと１２人の山賊たちと再び友情を誓ったのでありましたが・・、いいんでしょうか？

第7章　海

ローゼンヌの街のホテルに一泊し、翌日の昼前に海岸に到着しました。

「はあ・・・、向こうが見えないのねえ・・」

「なあ・・」

内海というので向こう岸が見えるのかと思ったら、はるか水平線までひたすら水がひしめいています。真っ平らに水面以外何もない光景というのはクラリスとヴァイオレットにかなりのインパクトを与えました。

「でもここは向こうのカリーファ大陸からテラスカーラの半島が飛び出している分ノール海でも狭い部分なのよ」

とリラの精が説明してくれました。なるほど海というのは想像以上に広い世界のようです。

ローゼンヌの海岸線は岩石質の崖部が多く占めていますが、今クラリスたちが立っている道の前は白く広い砂浜が広がり、海水浴の人たちが日光浴を楽しみ、波打ち際ではしゃぎ、にぎわっています。波がキラキラ光って、いかにも気持ちよさそうです。クラリスも丘の上からですが潮のにおいのする海の空気を胸一杯に吸いました。

「ガラスの精たちはどこにいるのかしら?」

彼女らは昨日のうちにこちらに着いているはずです。

「だいたいこの辺りにいると思うんだけど?」

こう人が多くては呼び出すわけにはいきません。クラリスはナージャを連れて海岸沿いの道を歩き始めました。ナージャは魔法の翼をしまってふつうの馬になっています。真っ白な美しい白馬なのでこれでも目立ちますが。

「熱いわね〜」

クラリスは手で首をパタパタ仰ぎました。クラリスはお気に入りの紺のドレスを着ています。これでも初夏用のフワリとした薄手の

ものなのですが、こちらの人は半袖のもっと軽快な服装をしています。あんまり薄着で恥ずかしい気もしますが、この暑さの中ではクラリスのドレスの方がずうっと変です。
「あーダメ。たまらないわ。わたしも薄い服を買うわ」
と、急きょ買い物することにしました。海水浴客向けのお店がたくさん並んでいます。ショーウインドウを覗きながら良さそうな店を選び、入りました。
「ボンジュー・マドムアゼ」
そうでした、ローゼンヌの南部は言葉が違うのです。というよりこちらシャンソン語がローゼンヌ国の公用語で、クラリスたちロヴィークのグラムフォン語は北部でしか通用しません。
でも買い物にたいした語学力も必要ありませんし、クラリスは人の心を読むのが得意ですし、こちらの人々は明るく愛想良く、クラリスは楽しく服選びし、白地に赤い線の入ったワンピースを買い、さっそく着替えさせてもらいました。
店から出てくると屋根の上で待っていたリラとヴァイオレットが下りてきました。
「そういえばこちらに妖精はいないわね？」
昨夜泊まった大きな街ではちらほら見かけましたが、海岸に出てきてからは1匹も見ていません。
「モナに向かったんでしょうね」
モナ国は海岸沿いのお隣の国です。小さな国ですが、お金持ちのリゾート観光地として有名です。
「邪魔が入らなくて好都合ね」
海水浴客のいない崖部に来て、ナージャを残し、波打ち際に浮かぶ岩の上にフワリと降り立ちました。クラリスはさすがに飛ぶことは出来ませんが魔力でうんと身軽になり、走り幅跳びをすれば8メートルは飛べます。
リラがテレパシーで呼ぶと崖を回って数匹の妖精の群れが飛んできました。透き通った体をしたガラスの精一族です。

一人、濃い青色でやたらと大きなマントのような羽根をなびかせている妖精がいます。海の精です。
もう一人、黒い体に銀色のラメをキラキラ光らせている者がいます。大鏡の精です。
「ごくろうさま」
「こんにちは、皆さん。よろしくお願いします」
「よろしく、小さな魔女さん」
さすが海の精と大鏡の精はどっしりと構えて落ち着いていますが、ガラスの精たちはキラキラ光る海のせいか、すでにハイテンションに張り切っていました。
「さあ作るわよお！　ここ？　ここにガラスの塔を作ればいいの？」
「落ち着きなさいよ」
とリラに笑われました。
「で？　どこに作るのがいいと思う？」
と、専門家の海の精に訊きました。
「ポリスか、クレオバトラ、どちらかの沖がいいと思いますよ」
首を傾げるクラリスに海の精が解説してくれました。
「ポリスはノール海の東に浮かぶ島国です。その昔はこのノール海一帯を支配し、今もその文化的影響は強く残っています。
クレオバトラはカリーファ大陸で長い歴史を誇る昔からの大国です。
どちらの国にも古代の神殿遺跡が多く残り、海中に沈んだ遺跡があります。そこに紛れさせればガラスの塔も目立たないと思います。それに古代の神々の伝説も多く残っていますから、海に妖精が現れても神の末裔と思って大事にしてくれると思います」
「陸に近いところがいいと思う？」
「浅い内海とはいえ沖は１５００メートル、深いところでは５０００メートル以上あります。そんな深い暗い海に沈めたのではかわいそうでしょう？」
「海ってそんなに深いんですか・・」

海の巨大さにはクラリスはただただ圧倒されるばかりです。
「ではどちらにするか、あなたに任せますから決めてください」
リラの精に言われ、海の精は
「クレオバトラにしましょう」
と答えました。
「ポリスは今マーマラ海峡の覇権をシヴィリとテュークメンと争って、あの辺りの海は殺気立っています。呑気なクレオバトラの方がいいでしょう。対岸のカリーファ大陸になりますからこちらからは不便ですがね」
何やらめんどくさそうな話です。
「大鏡さん、ララベル姫と話せますか？」
大鏡の精はお安いご用とばかりスッスッスッと指を動かすと空中に大きな長方形の鏡の膜を作り出しました。鏡が銀色に曇ると、真っ黒になりました。
「おーい、ララベル姫ー」
クラリスが呼びかけると鏡の黒がゴソゴソ鳴り、パッと明るくなったと思うとララベル姫の顔がドーンと大きく映し出されました。
『あら？　えーと、クラリス？』
ララベル姫の魔法の手鏡にはクラリスの姿が銀色の粒子の中に見えています。ララベル姫がよく見ようと覗くと、クラリスの見ている大鏡にはララベル姫の目が巨大に迫ってきます。クラリスはなるほど魔法の鏡を覗くと向こうにはこんな風に見えていたんだとちょっと恥ずかしくなりました。
クラリスは海の精の話を伝え、ララベル姫の意見を求めました。ララベル姫はうなずき、言いました。
『わたしもそう思います。今あの海峡は危険なようです。クレオバトラはよい選択だと思います』
ということで、ガラスの塔の建設地はカリーファ大陸のクレオバトラ沖に決定しました。
ガラス一族は

「よーし、行くぞおー」
「オー！」
とさっそく盛り上がって飛び立とうとします。海中にガラスの塔を建設するためには海の精の力が必要です。クラリスは慌ててガラス一族を止めて海の精に訊きました。
「イルカの精さんはどこです？」
と、海の精にも自分のイルカ人間化計画を話しました。
「なるほど、そういうことでしたか。では」
と、海の精は海面に手を当て、テレパシーを送りました。ほどなく、沖に白波が立ち、バシャバシャ迫ってきました。先頭に青い光が浮かんでいます。
イルカたちの群れと、妖精の国からやってきたイルカの精です。
「キャッホー、こんちはー」
青い体をしたイルカの精は髪の毛がプルルンとゼリーみたいにくっついて、体の光り方も周りに放射するのでなく半透明の体の中で強い光が光っていて、違います。顔つきもやっぱりイルカっぽいです。
「あなたがイルカの精さん？」
「そうだよー。よろしくうっ」
おどけてクルンと1回転しました。後ろのイルカたちも喜んでバシャバシャ水しぶきを上げて回転ジャンプを披露しました。波しぶきでクラリスのワンピースのスカートはびしょびしょです。イルカたちは悪びれもせずどうだと言わんばかりにクルクククク、と鳴き声を上げました。
「なあクラリス。なんかイルカってさー」
「ねえー」
ヴァイオレットもクラリスも本物のイルカを見るのは初めてですが、なんだかもうイルカという生き物の性格が分かってしまいました。クラリスはイルカの精に訊きました。
「どう？　イルカたちに話はしてくれた？」

イルカの精には事前にダイヤ女王からクラリスの計画が聞かされているはずです。
うん！とイルカの精は元気にうなずきました。
「妖精がイルカになって海の中にイルカの国を作るんだろう？　みんな快くオーケーしてくれたよ！」
なっ？と言うとイルカたちはキュルキュル鳴いて尾ビレで水面を叩いて賛同を表しました。
クラリスは呆れました。
「違うわよおー。イルカに、星の力で海の人間になってもらいたいの」
イルカの精はあん？と首を傾げました。
「どゆこと？　海の人間って言ったら、イルカだろ？」
「だからね、言葉をしゃべって、手を使って物を作ったり、文字を書いたり、そういう人間になってほしいの」
「なんで～？」
「だからねー」
クラリスはリラと海の精を見ました。二人とも肩をすくめました。クラリスはハアッと息を吐いて、
「はいはい、ちょっとこっち集まって」
岩から身を乗り出し、できるだけイルカたちを周りに集まらせ、額に魔力を集中させるとイルカの精を通してイルカたちに自分の頭の中のイメージを伝えました。
「うわわわわーっ！」
イルカの精はビックリして飛び上がり、イルカたちはピーッと悲鳴を上げていっせいに逃げ出しました。盛大な波しぶきにクラリスは頭からずぶ濡れになりました。
「お、おまえ！　な、なんて恐ろしい奴だ！」
イルカの精はクラリスを指さして怒り、イルカたちもピーピー非難の声を上げました。
「ああ、ごめんなさい。でもあなたに説明していたんではらちがあ

かないから・・」
「そうじゃないよお！　おまえ、イルカをなんだと思ってるんだよ！？」
「なにって、海で一番頭のいい動物でしょ？」
「その通りだよ。言っただろ？イルカは海の人間だって。イルカは海で一番賢くって、ちゃーんと自分たちの社会を持っていて、泳ぐのだってすんごい上手で、海の中でもっとも優れた動物なんだ！」
なっ？とイルカの精が言うとイルカたちはキュルキュル喜び、ブーイングのつもりでしょう、クラリスに向けて水をバシャバシャ浴びせかけました。ヴァイオレットは慌ててクラリスの肩から飛び上がりました。
「イルカは海で完成された人間と同等の高等動物なんだ。今さら人間なんかになりたがるイルカがいるもんか」
イルカたちはまた盛大にピーピーキューキュー鳴き立てました。
呆然とするクラリスにリラが気の毒そうに言いました。
「またずいぶん嫌われちゃったものねえ」
クラリスは髪の毛とスカートからぽたぽた海の水を滴らせぷるぷる震えていましたが、ストンと岩にお尻をついてしまいました。。
「あーあ、まったく予想外。なんてことかしら」
泣きたい気分で空を見上げるとカモメたちまでバカにしてアホーアホーと鳴いています。クラリスはハアッとため息をつき、気を取り直すと身を起こしてイルカの精とイルカたちに訊きました。
「それじゃあねえ、誰か心当たりない？海の人間になりたがるような、海の生き物に？」
イルカの精はイルカたちに向かってピーピピピピーとイルカ語で訊き、イルカたちはピーピーキュルキュル盛んに話し出しました。いくつか意見が出たようで、イルカの精が解説してくれます。
「クジラは駄目だな。のんびり屋の平和主義者だから、人間みたいに忙しいのは嫌いだ。サメも駄目だな。そこそこ頭はいいけど食うことしか頭にないバカだから。シャチは駄目だ。あいつらは頭が良

すぎて海がめちゃくちゃになっちゃうぞ。魚も駄目だな。あいつらは食べ物だ」
　ろくな候補がいないようです。海の精に助けを求めても海の精も肩をすくめるばかりです。
「ねえ、誰かいないのかなあ？」
　クラリスは半分くらいあきらめながら訊きました。海の人間になってくれる動物がいなくては、この計画は基本からダメです。
「お、ちょっと待て」
　イルカの精が言って、フムフムとイルカたちの話し合いに耳を傾けました。そして
「いたぞ、いい候補が！」
　と嬉しそうに言いました。
「だれ？」
　クラリスは一縷（いちる）の望みをかけて訊きました。
　イルカの精はエッヘンと威張って発表しました。
「タコ！」

　ガラス一族はクレオパトラ目指して出発しました。誰も行ったことがないのでリラの精が（彼女も行ったことはありませんでしたが）案内役として先導しました。
　海の精はクラリスを哀れに思って残ってくれました。彼女がいなくてはガラスの塔建設は困るのですが、
「海の中ならわたしは空を飛ぶ数倍のスピードで移動できます」
　ということで、今日の夕方までは居てくれます。それまでにどの生き物を海の人間にするのか決めなくてはなりません。今イルカの精とイルカたちが近くの海の生き物たちを集めてくれています。彼女たちは自分たちの意見「タコ」が快く受け入れられなかったのが不満ですが。
　何しろタコです。

クラリスの本で読んだ知識は、『足が8本もあって、グネグネ軟らかい体をして、悪魔の魚と呼ばれて人間から嫌われている』という程度で、もちろん山国のロヴィークではタコなんてまず食べることはありません。海の精が生態を補足してくれました。
「柔らかい体で岩などの狭い隙間に入り込むのが好きで、エビや貝を捕まえて食べています」
「それが海の人間にふさわしいんですか？」
「イルカたちの弁によるとそこそこ頭が良くてじっと考え事ばかりしている根暗な奴だからちょうどいいだろうとのことです。まあ・・、わたしもいいんじゃないかと思いますよ」
「タコかあ・・」
クラリスはあまり嬉しくない顔で言いました。
「わたしは物語に出てくる綺麗な人魚のような海人間を想像していたんだけどなあ・・」
あーあとため息をつきます。本当に本物の人魚が生まれたら、オーロラ姫がどんなに喜んだでしょう。
「タコは人間になりたがるでしょうか？」
「喜ぶと思いますよ」
「そうなんだあ・・」
クラリスはタコには申し訳ありませんがっくりしました。

近海の海の生き物たちが集まってきました。小さな魚たちから大きなカジキマグロ、カニやエビ、ウナギやウツボ、貝や珊瑚、サメにシャチにエイ、海亀、沖にはクジラの親子。ひとけのない海岸を選んでの海の生き物の秘密の会合ですが、人間が見たらびっくりするでしょう。食べたり食べられたりの生き物がいっしょにいますが、海の精がしっかり目を光らせているので平和なものです。
「おい、タコも連れて来ちゃったぞ」
と、イルカの背に乗ったイルカの精が口を尖らせながら言いました。ゴツゴツした岩の上を一匹のタコがのたのた上ってきました。

クラリスは初めて見るタコの、ほんとに申し訳ないんですが、白と薄い黒のまだらのぶにゅぶにゅした姿を見てゾゾゾッと背筋に悪寒が走ってしまいました。

タコは浅い水面から陰気そうな目でじっとクラリスを見つめました。クラリスは困って海の精に助けを求めました。

「タコ語って話せます？」

海の精はクラリスの困惑に笑って言いました。

「イルカのように言葉をしゃべるほどの頭脳はありません。魚などより多少物事の理屈を考えるだけです。あなたの海の人間のイメージを伝えてみなさい。その反応を見て判断しましょう」

クラリスはタコの目を見返して、この姿に思い描いていた人魚の姿はさすがに無理があるので、改めてタコの進化した海人間をイメージしました。

胴体（というのは本当は頭の部分の袋なのですが）を引き伸ばして8本あるうちの2本を腕にしました。先っぽを2本に分けて、さらに根元に補助の指を2本伸ばしてやりました。言葉をしゃべる脳を発達させてやり前頭部を大きくしました。表情を付けるために眉毛のような盛り上がりを目の上に付けました。発声できるように頬をふくらませ、太鼓のような膜を張りました。だいぶ人間らしくなりましたが、もうちょっとかっこを付けて頭部というか背中というか腹というか、グネグネの袋に髪の毛のように細く長い突起をいっぱい生えさせました。

と、まあ、これが精いっぱいです。あとはその2本の手を器用に使って小岩を積み上げたり貝殻で屋根を乗せたり、家を作って、そこで家族で文化的に生活する様子をイメージしました。

タコの頭脳でどの程度理解できるか疑問ですが、クラリスはテレパシーでそれらのイメージをタコに伝えました。

タコは目をまん丸くして・・丸いのは最初からですが・・どう思っているのでしょう？

「喜んでいるようですよ」

と海の精は言いました。クラリスは正直にため息をつきました。
どうやら海の人間はタコに決定のようです。
「じゃあ他のみんなはタコが海の人間になるのを承認してくれる？」
イルカたちはピーピー歓声を上げて飛び跳ねました。イルカの精が代表して言いました。
「いいぞ。話の出来る奴ができて楽しくなりそうだ！」
沖でクジラが潮を噴きました。
「けっこうなことだ、とのことよ」
と海の精が翻訳。
「ああ、いいだろうよ」
というのはシャチ。どうやらもうすでにどう自分の狩りに利用してやろうか考えているようです。
「こいつが人間だって？　かまわないが、こいつはお笑いだ」
と泳ぎ回っているのはサメ。落ち着きのない奴ですが、これはサメの呼吸のためで仕方のないところ。
「好きにしろ」
というのはエイ。クールな奴です。
他の魚やカニや貝やウミヘビたちは・・
「反応ないわね。なんにも考えてないわ」
「あ、っそうですか」
クラリスはもうすっかりあきらめています。
「じゃあタコさんに海の人間になってもらいましょう」
ということで解散になりましたが、
「そういえば」
と、皆が帰りはじめてから言う者がいます。海亀です。
３メートルもある大きな海亀で、２００年も生きているおじいさんのようです。みんなが帰っていくのをボーッと見送りながら、のんびり言いました。
「その昔人魚がこの海に紛れ込んできたことがあったそうじゃのお」

第8章　人魚

「なんですってえ！？」
亀なら森の川や沼にもいるのでクラリスにも言葉が分かります。
『人魚って、いるの！？』
海亀のおじいさんはゆっくりクラリスの方を向いて言いました。
「わしが子どもの頃仲間の年寄りから聞いた話じゃがな。そのじいさんも昔じいさんから聞いたそうで、そのじいさんも聞いた話だそうじゃが」
いったいどれだけはるか大昔でしょう？
「東のくびれから」
マーマラ海峡のことでしょうと海の精が注釈しました。
「1匹の人魚がこの内海に入り込んできたそうじゃ。漁師の網に捕まって、丘に連れていかれてしもうたそうで、哀れなことじゃ」
クラリスはすっかり興奮してしまいました。
「海の精さん！　人魚って本当にいるんですか？」
海の精は考え深い顔で言いました。
「わたしは知りません。海の妖精のわたしが知らない高等な海の生き物がいるとは思えませんが・・、しかし、パンサルーザにならあるいは」
「パンサルーザ・・」
パンサルーザ。それはこの陸の世界の反対側、海しかない地球の裏側の世界です。その広大な海の真ん中に大きな島があり、高い文明を誇っているという伝説がありますが、あくまで伝説で、それを証明してやろうと旅だった冒険家が過去いく人もいましたが、パンサルーザの中心目指してこぎ出していった者は誰一人帰ってきませんでした。
クラリスは考えています。海の精に訊きます。
「なんとかその人魚のその後を知ることはできませんか？」

「陸に連れていかれたとなると、マーマラ海峡周辺の国は、ポリス、シヴィリ、ユークリナ、テュークメン、クレオというところですか。人魚は伝説では非常に長命で、その肉は不老長寿の薬になると言われています。人魚を捕らえたのが事実なら、そういう伝説が残っていると思いますが？」

大鏡の精に訊きます。

「その海峡の国々に詳しい妖精か、伝説に詳しい妖精はいる？」

「その昔はポリスを中心に妖精の国出身じゃないその土地生まれの地妖精がたくさんいたそうだけど、今はそういう話は聞かないわね。あの辺りに詳しい妖精って、心当たりないけど」

海の精と顔を見合わせうなずき合いました。

「伝説に詳しい長老なら、鏡の四長老、水鏡の精、銅鏡の精、丸鏡の精、占い鏡の精でしょうね」

「訊いてみてください！」

大鏡の精はパッと手を開いて空中に４枚の鏡の膜を出現させ、そこにそれぞれ４人の妖精を映し出しました。なるほどいずれも人間離れした貫禄たっぷりの妖精の顔をしています。

『なんじゃ大鏡か。作戦はまだ先であろうが？　昼寝の邪魔をするでない』

「銅鏡様、皆さん。こちらの魔女から是非お尋ねがあります。協力してください」

クラリスはちょこんとお辞儀しました。

「こんにちは。是非皆さんの深い知識をお貸しください。人魚の伝説をご存じではありませんか？」

と、詳しい話をしました。４人はそれぞれフムフムとうなずきました。

『それはきっとポリスの神殿のミイラであろうな。わしは鏡を通した人のうわさ話でしか知らんが』

『いや、わらわは見たことがあるぞえ』

と言ったのは占い鏡の精、だそうです。

『そうであるな、かれこれ１０００年も前になるか、あの頃はわらわもピカピカのキラキラであったがなあ・・えーい、よいわ。託宣を頼まれたのじゃ。この肉は食うてもよいものかどうか。真っ黒に固まっておったから、腹をこわすからやめろと言うてやったが、はたしてどうしたかのう？』
「その肉は、本当に人魚の肉だったんですか？」
『知らん。ほんの一塊りであったからな。ただ、強い生命エネルギーは感じたから、本物であったかもしれん』
「そうですか、真っ黒なお肉になっちゃってたんですか・・」
クラリスはウーンと考え込んでしまいました。海の精が訊きました。
「１０００年も前の話で、とっくに死んでしまっているようですよ？　今さらどうするつもりです？」
クラリスはちょっと後ろめたいような目つきで言いました。
「ミイラでも本物の人魚の肉体が残っているのなら、その肉体から人魚を再生しようかと思っています」
「死人を甦らせるのですか？」
「いえ、別の個体を作り出すんです。一人だけ甦らせても孤独でしょう？　１０人くらい、別々の個性の雌雄を作ります」
「できるの？」
「肉体に記憶が残っていれば・・たぶん・・」
「あなたはそういうことが得意でしたねえ」
大鏡の精は海の精と鏡の長老たちにいかがでしょう？とお伺いを立てました。海の精は
「正直なところ、好奇心があります。本当に人魚がいるなら、わたしも会ってみたいです」
と賛成しました。鏡の長老たちは、
『魔女のすることに否応も言えんだろう。好きにするがいいさ』
と言いました。どうする？と大鏡の精に訊かれ、クラリスは正直な気持ちを言いました。

「わたしは星の力で人魚を甦らせたいと思います。問題が起これば、責任はわたしが負います」
海の精が言いました。
「わたしも賛成しますから、責任はいっしょに負いましょう」
大鏡の精も言いました。
「わたしも仲間になりましょう。あなたは、あの人の大事な親友ですからね」
クラリスは嬉しくてニッコリ笑って、お礼を言いました。海の精が笑って言いました。
「しかしそれも本当に人魚がいて、今もその肉体が残っていればの話です。どうします？」
大鏡の精が答えてクラリスに言います。
「またあなたの精神をポリスの鏡に飛ばすことはできます。しかしいくらあなたが強い力を持った魔女でも神殿にある肉体を海まで運び出すことはできないでしょう？」
「海まで運べればあとはわたしがクレオバトラまで運んであげられます」
と海の精が言いました。クラリスが言います。
「精神だけでも送ってもらえれば、なんとかなるでしょう。わたし、魔女ですから」
「そう。では行きますか？」
「ちょっと待てよ」
と、ヴァイオレットが忠告しました。
「おまえまた寝ちゃうんだろ？　こんなところで寝ちゃっていいのか？」
それもそうです。
時刻はもう４時を回って、お昼を抜いたクラリスはお腹ぺこぺこです。安全な宿を見つけて、ポリス潜入作戦は夜決行されることになりました。
海の精はそろそろクレオバトラ目指して出発しなくてはなりませ

ん。
「海の水に手を浸してテレパシーを送ればわたしに通じます。わたしからの声は分かりませんが。ポリスの方にも気を配っておきますから、人魚のミイラが海に帰れば、わたしには分かります」
　海の精はポチャンと海に飛び込み、スルスルスルと大きな羽根を使った上手な泳ぎで安全な沖まで泳いでいき、深く潜ると、海流を操ってクレオバトラへの高速トンネルを作り、その中をギュルルルルルルと、すごい速さで泳いでいきました。
「あたしたちも見に行こうぜい！」
　と、イルカの精もイルカたちと共にクレオバトラ目指して泳ぎだしました。こちらはただの野次馬です。
　のんびりボーッとしていた海亀もボーッとしたまま沖に帰っていきました。他の魚たちはとっくに解散しています。
　おっと、1匹。すっかり存在を無視されたかっこうのタコが、岩の間からギョロリと陰険な目で海上のクラリスたちを睨み、ニョロニョロ海底へ歩いていきました。何か考えていそうで、考えてなさそうで、よく分かりません。

　クラリスは町の人たちの噂話をテレパシーで収拾し、食事の美味しいホテルを選んで部屋を取りました。9歳の女の子の一人旅は怪しまれましたが、ララベル姫直筆の身分証があるので平気です。
　レストランの食事にヴァイオレットと大鏡の精もつき合いました。テーブルの上に浮かんでいる妖精に他のお客さんはびっくりしましたが、妖精大発生のニュースは伝わっていて、珍しがりはしましたが大騒ぎになるようなことはありませんでした。
　妖精も物を食べます。ふつう自分の色の光、火花の精ヴァイオレットなら火の赤色の、大鏡の精なら鏡の銀色の光を浴びればそれでエネルギーが蓄えられ、衰弱して死ぬということはありませんが、好物の食べ物はあります。

ヴァイオレットは甘いケーキが大好きですし、大鏡の精はコーヒーが大好きだそうで、クラリスはそれぞれにご馳走してあげました。
妖精が食べた物はほとんどエネルギーとして蓄えられ、光の色が濃くなります。あんまり食べ過ぎて光が濃くなり、そのまま魔力を使わないでいるとボンッと爆発してしまいます。ヴァイオレットはたまにケーキの食べ過ぎで爆発しています。
クラリスは頼んだ海草サラダに細切れのタコが入っているのを見て複雑な気分になりました。クラリスは滅多に肉は食べません。ふだん月に1度だけです。
ムニャムニャと食べるとけっこう美味しいです。
タコは食べ物のままでいいかなーと、タコが聞いたら真っ赤になって怒ることを思いました。

部屋に帰ると大鏡の精が壁にクラリスの全身が楽に映る大鏡を出現させました。真っ黒になって、次々ものすごい速さでさまざまな鏡に映る映像が現れては消えていきました。
「これがそうね」
真っ黒な背景の中に小さな暗いぼんやりした円い窓が現れました。暗くて小さくて何が映っているのか分かりません。
「大きくしましょう」
大鏡の精が円を大鏡の横幅いっぱいまで拡大しました。
「やっぱりよく分からないわ」
暗いせいばかりでなく、汚れてくもっているようです。
「占い鏡の精に教えられた同じような場所の同じような鏡に合わせました。どうやらこれは教えられた鏡そのもののようね」
「１０００年前の鏡なの？」
クラリスはふうーんと感心しました。神聖な鏡として大事にされてきたのでしょう。
「この方がいいでしょう」
と大鏡の精は鏡を壁から天井に移しました。クラリスはベッドに

寝転び、
「じゃ行ってきまーす」
と目を閉じ、スー・・と寝息を立てたと思ったら天井の鏡の中に大きな顔が現れました。
「うわっ、巨大クラリス！」
ヴァイオレットがおどけるのを叱って、
『体の面倒よろしくね。ああ、もう、やだなあ』
昼間海で過ごした疲れが出たのか、クラリスの体はクカー、と口を開けていびきをかきました。
「気にすんなって。いっつもこんなもんだよ」
『お黙り！　じゃ、頼んだわよっ』
照れ隠しに乱暴に言って、クラリスの姿はぼんやりした鏡の向こうに消えていきました。

クラリスの心が現れたのは石造りの神殿の中でした。広い部屋ではありませんが、四方にずらりと6本ずつ筋の掘られた円柱が並んでいます。その向こうに壁がありますが四隅が切れて透き間が空いています。クラリスは半透明（ふつうの人間の目には見えないはず）の姿でスーッと隙間から外へ出ました。
そこはまた一回り大きな部屋になっていて、石造りの天井が一部欠けて月光が差し込んでいます。おかげで真っ暗ではなかったわけです。
見渡してみると、壁際にいくつも細長い箱が並んでいます。もともと黒く塗られていたようですが、相当古い物のようで、塗りが剥げ、木にすが入って表面はぼろぼろに崩れてきています。
どうやらそれらは棺桶のようです。
ここは死者を安置する霊廟なのです。
夜中に子どもが一人でこんなところにいたら怖くてどうにかなってしまいそうですが、クラリスはてんで平気です。

クラリスは実に落ち着いて、さて、と考えました。
改めて中央の小部屋に戻って自分が出てきた鏡を見ます。古ぼけた小さな丸い鏡が、神殿のミニチュアに収められ、そのミニチュアは石造りの細長い箱の上に載せられています。
どうやらこれも棺桶のようです。しかし外の物と違って石造りで、レリーフも彫られ、ずっと上等です。誰か高貴な身分の人の物のようです。
「どれどれ」
クラリスは恐れを知らず棺桶の中に顔を突っ込みました。金属でなければたいていの物は通り抜けられます。
「暗くて見えないわ」
顔を出すと今度は手を突っ込んで中身を探りました。何か触る気配がします。
「誰か眠っているようね」
棺桶ですから中に死者が眠っているのがふつうですが。
「でも何か違う気配がするわね」
クラリスは中身をしっかり見てみたい気になりました。
「えい！」
と魔法で石のふたをずらそうとしましたが、ビクともしません。
「やっぱり体がないと魔力が全然足りないわね。しょうがない、誰か人を捜そうっと」
スーッと壁を突き抜け、もう一つ壁を突き抜け、外に出ました。

そこは小さな丘の上でした。なだらかな坂の先は月光に照らされた海が広がっています。霊廟を振り返ると本でお馴染みの丸い柱に飾られたなかなか可憐な建物です。ただし長年の風雨でだいぶ石が丸くなっています。背後にもうちょっと高い山がいくつも盛り上がっています。しかし全体に小さなものばかりでロヴィークのようにすごく高い山はありません。ここはポリス島、海底から生えてちょっと顔を覗かせた山の上なのです。

海岸へ下りる坂道の途中に柵が立っています。小さな小屋も建っています。そしてその柵に至るまでの坂に、たくさんの石碑が建っています。お墓です。
この丘は全体が墓場なのです。その頂上に立つ霊廟の、特別の石棺に眠る人物は誰なのでしょう？
クラリスはスーッと飛んでいって小屋を覗きました。中央の道に面して窓があります。どうやらこの墓地の管理小屋のようです。すぐ先の柵の扉は閉まって鎖が巻かれ、南京錠で締められています。
小屋の中に入ってみましたが、誰もいませんでした。蜘蛛の巣が張って、もう長いこと使われていないようです。
誰か使えそうな腕っ節の強い男を捜そうかと、夢の世界に入ろうとすると、丘を登ってくる影を見つけました。
辺りをはばかるように上ってくる影は４つ、近づいてくると２人ずつの若い男女でした。
「おい、扉が閉まっているぜ。高くて乗り越えられないぞ」
「あははー、ほっとしてるんだー？」
「こんなボロい鉄柵・・、ほら、抜けた！」
という会話はポリスの言葉で交わされていますが、クラリスはテレパシー翻訳して聞いています。一人の男が地面から引き抜いた鉄棒を無理やり横枠から外し、広がった隙間を体を横にして通り抜けてきました。
「来いよ」
女の子二人がキャッキャと笑いながら通り抜け、男の子が辺りを気にしながら通り抜け、クラリスの方を見てビクッと硬直しました。
「おいグスター、どうした？」
「い、いや、なんかそこに女の子が立っているような気がして・・」
「え～、どこどこ？」
「どこかな～？」
「へっへっへ、盛り上げてくれてありがとうよ、臆病グスター君」
三人に笑われてグスターは渋い顔をして、やはり気になるように

クラリスのいる方をチラチラ見ました。
　クラリスはそこにどうどうと立っています。いえ、浮かんでいます。普通の人から見ればお化けといっしょで、見える人にしか見えません。
『あの男の子はなかなか見所がありそうね』
　自分よりずっと年上の青年を坊や扱いしてクラリスはフフンと笑いました。
　４人は、リーダー格のヴァルがランタンを持っていますが火は入れず、忍び足で坂を上っていきます。クラリスは、ははあーと思ってニヤリとしました。彼らはここに肝試しに来たのです。なんて好都合でしょう。
　霊廟の扉にはしっかり閂（かんぬき）がかかり、頑丈な南京錠がかかっています。どうするのかと見ていると、彼らは後ろに回り、ヴァルが「たしかここら辺だ」と壁の一部に手をかけ、ガクンと取り外して横に立てかけました。あとには人が十分くぐり抜けられる穴が開いています。どうやらここは若者たちの肝試しの定番の場所のようです。
　ヴァルが入り、おどけて「うわわ～」と悲鳴を上げ、腕をニョキッと突き出して来いよと手招きしました。ヴァルの彼女のキリエが引っ張り上げられ、中の笑い声に遠慮してしばらくしてから友だちのルネが入り、グスターが続きました。クラリスはイタズラ心を出して彼の耳にフッと息を吹きかけてやりました。ヒッと飛び上がったので三人の仲間といっしょにクラリスも笑い転げました。かわいそうにグスター君は
「おい、やっぱり何かいるぞ！　やばいよ、帰ろうぜ」
　と本気で怯えてしまいました。犯人のクラリスは舌を出してちょっぴり反省しました。
　ヴァルがライターでランタンに火を入れました。オレンジ色の明かりが広がります。クラリスも中に入りました。若者たちはランタンで壁や柱を照らし、並ぶ木棺に近づいていき、さすがに息を詰めてじっと見つめました。ヴァルはキリエにランタンを預け、木棺の

ふたに手をかけました。ぐっと力を入れるとふたはガクッと少し動きましたが、クギが打ち付けてあってそれ以上は動きません。
「おい、よせよ」
グスターが言って、女の子二人もさすがに怖そうにヴァルを見つめました。
「一つふたの開くやつがあるんだ。おまえたちもミイラを見たいだろ？」
ミイラ？　クラリスは興味を持って一番簡単そうなグスター君の頭の中を覗きました。
『キャンディー王女と１０人の乙女たち』
という見出しの記憶を読みました。
『１０００年の昔、ポリス帝国との戦争に敗れ捕虜となったブルータリス国のキャンディー王女は類い希な美しい女性で、時の皇帝アレクサンドラ7世に求婚されたが、これを断り、皇帝は怒り、王女と彼女に付き従う１０人の乙女たちを海神の生け贄に捧げた。しかし海神の妻が王女のあまりの美しさに嫉妬し、夫が彼女を妻とするのを恐れて王女たちを石に変えてしまった。皇帝はそれを見て海神が怒り奥さんとケンカするのを恐れ、王女たちを丘に引き上げ、霊廟に安置した。王女の美しさは石になっても変わらず、その姿はまるで生きているように精気を保っていた』
ふうーん、なるほどねえ、とクラリスは感心しました。こちらの神様たちはずいぶん人間くさいなあと。
しかし人魚とは関係ないみたいです。
でもそんなことはどうでもよく、クラリスもその類い希なる王女様を見てみたくなりました。
ヴァルは三人が怖がるのを無視してふたの開く木棺を捜しました。
「これだ！」
簡単にずれてぽっかり中の暗がりが覗きました。
「来いよ。ほら、しっかり照らせ」
キリエが恐る恐るランタンの腕を伸ばし、影がブルブル震えまし

た。
「開けるぜ」
ヴァルがゴゴゴゴゴゴ、とふたを押していき、とうとう向こう側へ押し倒しました。ランタンの明かりに白い物が映し出され、女の子二人はキャッと悲鳴を上げて抱き合いました。
「石の体だ」
石の顔がボロボロになった布をまとって寝ていますが、これは石を人間が彫刻した物です。適当な造形でぜんぜん偽物です。女の子たちはホッとしました。ヴァルは緊張が解けてつまらなそうな顔をしましたが、いや待てと、その顔を持ち上げました。
「きゃーーーっ！！」
今度こそ女の子たちは本気の悲鳴を上げました。ヴァルが持ち上げた石の仮面の下によれよれの髪の毛を生やした骸骨が現れたのです。
きゃーきゃー悲鳴を上げる女の子たちを黙らせてヴァルはチッと舌打ちしました。
「なんだ、ただのガイコツじゃねえか。やっぱり伝説は作り話か」
ヴァルは仮面を元通りかぶせるとふたを引っ張り上げ、乱暴にバタンと閉めました。
罰当たりな。ここはやはりクラリスが懲らしめてやらなくてはなりません。

第9章　古の王女（前書き）

いにしえの、と読みます。念のため。

第9章　古の王女

「つまらねえ。帰るか」
すっかり興味をなくしたヴァルに三人はほっとしてうなずきました。
ここで帰られたのでは困ります。クラリスは誰にしようかな？と指さしながら、決めました。
「ルネ？」
二人が穴に向かったのにルネは突っ立ったまま動こうとしません。グスターの声に前の二人も振り向きました。
「ルネ、どうかしたの？」
ルネは突っ立ったまま大きく目を見開いて虚空を見つめ、瞬き一つしません。
「ルネ？・・」
「ケラケラケラケラケラ」
ルネが突然子どものように声をあげて笑い出し、三人はその不気味さにわっと飛び退きました。
「ケラケラケラケラケラ」
ルネは笑いながら腕を振り上げ、足を振り上げ、奇妙な踊りを踊り始めました。グスターが叫びました。
「し、死霊の踊りだ！」
キリエが悲鳴を上げてヴァルにしがみつきました。ヴァルはその肩を抱いてルネとグスターを叱りつけました。
「こ、こら！　ふざけるな！　脅かそうたって駄目だぞ」
しかしヴァルのその声も震えています。ケラケラ笑いながらランタンの灯の中で影を大きく揺らめかせながら踊るルネのその不気味さ。なんといってもここは死者の家の中なのです。
「ややや、やめろ！・・」
ヴァルは恐ろしさに震え、泣きながら外に逃れようとするキリエ

をかばって自分も外に出ようとしました。
「待てえ～～～～」
ルネが踊りながら言いました。
「わらわをここから出せ～～～。さもなくばこの娘を生け贄として連れてゆくぞえ～～」
キリエはボロボロ泣くばかり、ヴァルもひきつった顔で逃げようとしました。
「待て！」
意外にもしっかりした声でグスターが言いました。彼は踊るルネの前にひざまずくと神にお伺いを立てるように訊きました。
「あなたはもしやキャンディー王女様ですか？」
「その通りである～」
「石棺のふたを開けて、よろしいんですか？」
「苦しゅうない。開けよ～～」
「ははあー・・」
グスターはかしこまり、ヴァルからランタンを取り上げ腕を掴んで中央の部屋に入りました。キリエは一人になるのが怖くてその場に立ったまま踊るルネを見て泣き続けています。クラリスは『よしっ』とガッツポーズを取り、この子が一番罰当たりです。
グスターは床にランタンを置き、石棺の上の神殿のミニチュアを降ろし、ふたに手をかけ、ヴァルにも持ち上げるようあごで指示しました。
「いくぞ、そーれ！」
そーれ！そーれ！と力を込めると、何度目かでバカッと持ち上がり、せーーのーー、と力を入れて向こう側へ押し上げました。ズズズズズと石がこすれ、ふたはバッターン！・・・・とものすごい音をあげて向こうの床へ落ちました。グスターはランタンを取り、二人は恐る恐る中を覗き込みました。クラリスもルネの死霊踊りを「ループ再生」にして棺の中を見に行きました。
中にはやはり石の仮面がすっかりしなびていますが白い布をまと

って横たわっています。さっきの仮面よりいくらか彫りが上等ですが、やっぱりちゃちな物です。
「仮面を外してよ」
グスターの耳元で言うとグスターは操られるように仮面に手をかけ持ち上げました。
「・・・・・・・・」
三人とも現れた物に驚き、すっかり心を奪われてしまいました。
ミイラです。
しかし、なんと美しいミイラでしょう！
カサカサに乾いた物ではありません。まるで瑪瑙（めのう）を彫っててていねいに磨き上げたようにつるつるの表面をしています。頬と眼窩が幾分落ち窪み、唇に乾いたしわが寄っていますが、それにしてもその美貌は類い希なるの呼び声に少しも恥じるものではありません。
黒髪もとろけて一つにまとまっていますが宝石のように透明に輝いて、真っ白な肌をして、まさに伝説の王女にふさわしい絶世の美女です。
クラリスは思わず『美味しそう』と舐めてみたくなりました。もちろん名前からの連想です。
それにしてもいかに死体とはいえよくも１０００年もの間盗まれずにいたものだなあと感心しました。
と思ったら、
「あらこんばんは。おじゃましてます」
いつの間にかクラリスのとなりにこれまた美しい黒髪の乙女が立って棺の王女様を見つめています。足が透けています。本物の幽霊です。
「あなたがこの方を守っていたの？」
乙女はクラリスをきつい目で睨んで問いました。
「あなたは、王女様をお救いくださいますか？」
「救うって、どういう意味？」
「王女様はこちら側にはいません。まだ、ここで眠っていらっしゃ

るのです」
「死んでないってこと？」
「だと思います。あなたは、それに気付いたのでしょう？」
「まあ、そうじゃないかなーと思ったけど」
クラリスが最初にこの棺の中を覗いて感じた変な感じ、それは生命の動きが全くないのに、死者の空虚さも感じなかったのです。
「でも固まってるわよねー？　魔法・・かしら？」
違うような気がしてクラリスは首を傾げました。乙女が答えました。
「人魚の肉を食べたせいです」
「人魚の肉！？」
「そうです。王女は人魚の肉を試食させられてこのように固まってしまわれたのです」
「ははあ、なるほどねー・・」
クラリスはテレパシーですぐに事情が飲み込めました。捕虜となった王女が皇帝の求婚を断ったところまでは伝説といっしょ。伝説では海神の生け贄にされるのですが、実際は「不老不死の薬」と噂される人魚の肉を試食させられて、このようになってしまったのです。
「じゃあやっぱり人魚の肉はほんとうにあったのねー。それは、今もあるの？」
「それは・・」
乙女は疑り深い目でクラリスを見て言いました。
「王女を救ってくださったら教えます。魔女殿」
「あらら。はいはい」
仕事を押し付けられるのも慣れてしまいました。
「眠り姫を目覚めさせるのは慣れてるんだけどー・・」
クラリスはぼーっと王女に見とれているグスターに命令しました。
『ルネの踊りをやめさせたかったら王女の体を海に運びなさい！』
グスターはハッとしてルネの様子を見に戻りました。ルネは汗を

びっしょりかきながらトランス状態で死霊踊りを踊り続けています。キリエは相変わらず泣き続けています。グスターは決心して部屋に戻ると、布ごと王女の体を抱き起こしました。石がかぶせられていたのは顔だけでした。重さはふつうの女性と変わりません。ぼーっと見ているヴァルに「手伝え！」と命じて、王女をそーっと棺から出し、柱や壁にぶつけないように外の部屋に運び出しました。キリエがギョッとして泣きやみ、信じられない顔で王女を見つめました。ヴァルが穴の外へ下り、キリエが慌てて追おうとするのを止めてグスターは言いました。

「王女様。必ずあなたを海に運びますから、どうかもうルネを許してあげてください。約束を違えれば僕の命をさしあげます」

クラリスは彼の命なんて欲しくないのでルネの踊り回路を切ってやりました。くたっと座り込むルネにグスターは駆け寄って抱きしめたい思いでいっぱいでしたが、王女を支えているのでできません。キリエに頼んで外に連れ出してもらい、ヴァルに手伝わせて王女の体を傷つけないように気をつけながら穴から外に出しました。

二人で王女をかついで海に向かいます。坂道を下りきると、狭い砂浜になっています。

『全身が潜る深さで海に浸けて』

命令通り二人は膝上の高さに波が来るまで進んで、王女をそっと沈めました。王女はプクプク泡をあげて沈みました。

二人は浜に上がってきて次の指示を待ちました。クラリスも何か変化がないかじっと待ちました。

１０分ほどじいっと待ちましたが、何も変化はありません。

乙女の幽霊が言いました。

「この方法は皇帝の学者たちも試しましたが」

「なんだ、そうなの」

クラリスは考え、それじゃあ、と

「熱してみましょうか？」

「王女が膨らんでは困ります。それも学者たちが試しました」

「パスタみたいにはいかないか」
クラリスはウーン・・と考えました。王女はものの見事にカチカチに固まっています。ふつうこれだけ硬く固まってしまったら、何らかの手だてで溶かしても、ドロドロになってしまって、元のみずみずしい組織を甦らせることは出来ません。
『不可能。でも王女の魂はこの肉体を離れていない。ということは、何か必ず肉体を甦らせる方法があるはずだわ。どうしたらいいのかしら？』
「あなたは人魚の姿を見たことはあるの？」
「いえ。話にしか」
「魚っぽい人間なの？　それとも人間っぽい魚なの？」
「・・人間っぽい魚・・でしょうか？」
「そうなんだ。じゃあ人間とは体の造りが全然違うのかしら？」
「さあ？・・・・」
ふーむとクラリスは考えました。人魚の肉を食べてこうなった以上やはり海の水がカギになるように思われます。しかし実際こうして海水に浸けても駄目。となれば・・
「体内に海水を取り込まなければ駄目なのかしら？」
人魚が基本的に魚なら、呼吸はえら呼吸を行っていたと想像できます。体内に水を吸い込み、水に溶け込んでいた酸素を吸収する。
『一か八か・・』
肺か、心臓に、海水を注入してみようか？　でも間違っていたら、本当に王女を殺してしまう・・。さあ、どうする、クラリス！
「あ、あそこなら」
クラリスは思い付いて海に向かって魔力を使いましたが、
「やっぱり全然魔力不足。ちょっとあなたの体を借りるわよ」
「え、なに？　きゃっ」
なんと、クラリスは幽霊に乗り移ってしまいました。少しでも魔力を確保するためですが、それにしても怖いもの知らずというか無頓着というか。

「１０００年主を守ってきた力を貸しなさい。えい！」
クラリスの乗り移った幽霊が海に鋭い魔力を送ると、小さいですが強力な渦を巻き、王女のおへそに伸びていきました。
「さあ、生まれ変われ！！！」
ほんの微弱ですがクラリスの魔力が渦に注がれました。
渦の根が王女の体をくるむ白い布を破りおへそをくるくる刺激しました。へそは生まれる前の胎児の時にお母さんとつながって酸素や栄養を送ってもらうへその緒の名残で、産まれてからの役割はなく完全に閉じてしまっているのですが、
果たして？

ゴボリと大きな泡が浮き上がってきたかと思うとバシャバシャ海面にしぶきが上がり、ザバアッと、黒髪をおどろに顔の前に垂らした人型が立ち上がったので、浜で見ていた二人の若者は「ヒイッ」と悲鳴を上げて腰を抜かしました。

「ゲホゲホゲホッ。なによ、今度は水責め！？　いい加減にしなさいよ！殺すならさっさと一思いに殺してちょうだい！　何されたってぜ～～ったい、あんなヒヒ爺いのお嫁さんになんてならないんだから！」
わっと波に足を取られてこけ、悪態をつきながら起き上がった王女は邪魔な大量の前髪をかき分け、
「あら、夜。ねえ、そこの二人！　他に誰かいないの？　わたし、なんでこんな・・海なんかにいるわけ？　ぼけっとしてないで説明しなさいよ！」
と早口で喚いているのは１０００年前のブルータリス国の言葉をしゃべっているのでポリスの現代の若者たちに通じるわけありません。二人はただただ驚いてガタガタ震えるばかりです。
王女もなんだか変なことに気付いて不安に思いだしました。
「キャンディー姫！」

クラリスを振り払って乙女の幽霊が王女の元へ飛んでいきました。
「ああ、お懐かしい！　１０００年前と変わらぬお美しさ！　う、嬉しゅうございます・・」
キャンディー王女は乙女の幽霊に気付いてギョッとしました。
「キャア～～、お化けえ～～～！」
どっちもどっちよねーと思いつつクラリスも王女の元へ飛んでいきました。
「ちょっとちょっと王女様、落ち着いて」
「キャーキャー小さいお化けえ～～」
「お化けじゃなくって・・、まったくどうしてこんなかわいいお化けが怖いのよ、じゃなくって、わたしは魔女です。で、こっちの本当のお化けは、あなたのお知り合いなんじゃありません？」
「へ？・・」
よく見ればたしかにかわいい女の子ですし、王女は恐る恐る乙女の幽霊を見ました。幽霊はボロボロ涙を流しています。
「なんだ、ガルマじゃない。あなたいつの間にお化けになんかなっちゃったの？」
王女は一転好奇心にかられてまじまじ幽霊＝ガルマを見つめました。
クラリスも説明を求めました。ガルマは涙を拭って答えました。
「王女様は求婚を拒まれ怒りに駆られた皇帝に人魚の肉を食べるよう命じられました。もし伝説通り永遠の命をえられたならば自由にしてやる、と。王女様はヤケになって人魚の肉を食べ、すぐに固まってしまわれました」
「そうよね、わたし人魚の肉ってのを食べたのよね。で、なんだかすっごくだるくなって、たまらず床に寝転がって・・、その後の記憶はないわ」
「固まっちゃったわけね、カッチンカッチンに。で、その後どうしたの？」
「王女様がそのようになってしまわれたので皇帝は王女を妻にする

ことも、自分が人魚の肉を食べて命を永遠のものにすることもあきらめました。しかし皇帝は固まった王女様を飾り物として宮殿に置こうとしたのですが、夫人に遠慮してこれもあきらめました」
「ああ、伝説の海神と奥さんの話って皇帝自身のことだったのね？」
「はあ。その後残された王女様の忠実な女官たちは皇帝に願って自分たちも人魚の肉を食べました。皆王女様の美しいお姿を見て、これが死んでいる姿とはとても思えなかったのです。いつか息を吹き返すことを信じ、その時もお側にお仕えしようと決心したのです。皇帝としても更に人魚の肉の実験が出来るわけですからこれを許しました。女官たちは人魚の肉を食べ、皆、王女様と同じく固まってしまったのです・・・」
　ガルマは何かひどく言いづらそうにし、突然王女の前にひれ伏しました。
「お許しください王女様。皆は人魚の肉を食べて固まってしまいましたが、わたし一人だけ食べず、一人だけ生き残ってしまいました。どうかどうかこの不忠義をお許しくださいませ・・」
　ザッバーンとひれ伏すガルマに波が覆い被さります。ここは膝丈もある海の中です。
「えっとー・・？」
　よく事情の飲み込めていないキャンディー王女。クラリスは
「まあここじゃあなんですから」
　と、浜に上がることを提案しました。
　あの世から甦った伝説の王女と訳の分からない白い浮遊物が上がってくるので若者二人はあたふた逃げ出そうとしました。
「ストーップ！　あんたたちにはまだ力仕事を頼むから大人しく待っていなさい」
　クラリスに命じられて二人はまたへなへな座り込みました。
「えっとー・・」
　キャンディー王女は自分なりに考えて言いました。
「生きているのはわたしの方よね？　死んじゃってるのはあなたの

方なんじゃない？」
「はあ、それはあの、１０００年後の今のことで、当時は王女様と仲間たちが死んだと思われていたわけで、わたしはその固まっていませんから・・」
「ふーん。ま、なんでもいいわ。とにかく、あなたがわたしをまた動けるようにしてくれたんでしょう？」
「この魔女殿に頼んでですが」
「じゃあやっぱりあなたはたいした忠義者じゃない！」
取りあえずクラリスの功績は無視して王女はガルマを爽やかに称えました。クラリスも彼女が忠義者であることに異議はありませんが。
「もったいなきお言葉・・」
ガルマはまた顔を伏せて涙をこぼしました。
「でもなんかあなたババ臭くなったんじゃない？」
腰に手を当て顔をしかめる王女にガルマは泣き笑いの顔を上げました。
「それはまあ、わたくし、１００歳まで長生きしてしまいましたから」
「１００歳！　まあすごい！」
「はあ・・、恐れ入ります」
クラリスはいい加減この大ボケな会話に疲れてきました。
「ガルマさんはなんで人魚の肉を食べなかったの？」
「それは・・、好きな男性がおりまして・・」
「あーっ、知ってる知ってる！」
王女はガルマを指さした腕をブンブン振ってキャーキャー喜びました。
「あの護衛官の隊長さんでしょ？　二人して顔を見合わせて、ヒューヒュー、赤くなっちゃって、もう、かわいいんだからあっ！」
クラリスはガルマに尋ねました。
「キャンディー王女って何歳なの？」

「１４歳です」
「じゅ、１４歳っ！！？？」
　クラリスは改めてまじまじと王女を見ました。てっきり２３、４歳くらいだと思っていました。ずいぶん綺麗で大人っぽくて・・と思いましたが、こうしてしゃべっているのを見ると、たしかに、子どもです。
「ね、そうでしょ？そうでしょ？」と訊く王女にガルマは赤くなって「はい・・」と答えました。
「やったー！　きっとそうだって噂してたのよー！　おめでとうっ！」
「ありがとうございます」
「ま、めでたしめでたしならいいけどね」
　クラリスも呆れながら笑うしかありません。
「その後わたしたちは結婚し子どもにも恵まれました。わたしは生きている間あの霊廟の管理人を務め、死んでからも王女様と仲間たちの下へ帰りたいと願いながらかなわず、今日という日の来ることをずっと待っておりました」
「旦那さんのところへ行けばよかったのに」
「王女様と仲間たちの許しを得られなくてはとても・・」
「バカねー。それってもう１０００年も前のことなんでしょう？そんな大昔のこと、みんなとっくに忘れているわよ！」
「はあ・・」
　さっき目覚めた王女は１０００年前が昨日のことだったくせに、まあこれは王女の優しさと思ってあげましょう。クラリスがフォローしてあげました。
「あの世の時間って魂の抱える思いによって全然長さが違うみたいだから、これからだってきっと旦那さんの魂と巡り会えるわよ」
「そうですか」
　ガルマは偉大な魔女の知識に嬉しそうに微笑みました。
「とにかくー、わたしが眠っている間にいろいろあったわけねえー」

感心する王女にクラリスは
「ほーんと、どっかで聞いたような話ねー」
と苦笑しました。
話がいい加減長くなったので急ぎます。
「じゃあ霊廟の他の棺には女官さんたちが人魚の肉を食べて固まっているわけね？」
「そうです」
「じゃ、目覚めさせましょう」
クラリスは若者二人に命じて次々棺から固まった女官たちを浜まで運ばせました。二人ともすっかり感覚が麻痺してしまって夢の中の気分です。上で抱き合って震えていた女の子二人も忙しそうな二人に次第に好奇心に駆られ浜まで見に下りてきました。
浜ではクラリスが今度はキャンディー王女に取り付いて、海中に横たえた乙女を、魔力でおへそに海水を注ぎ、次々目覚めさせていきました。人間にも多少魔力の素はあるのです。キャンディー王女はキャッキャと面白がり、目覚めた女官たちと抱き合って喜び合いました。
女官たちは全部で９人、ガルマを入れて１０人で、皆１３歳から２６歳の乙女たちです。
彼女たちは一人だけ脱落した許しを請うガルマを快く許し、それどころか死してなお１０００年も棺を守り、こうして王女と自分たちを目覚めさせてくれた彼女に心から感謝しました。やっぱりクラリスの功績は二の次です。
クラリスはオッホンと咳払いしてガルマに言いました。
「さあ、約束は果たしたわよ。人魚の在りかを教えてもらいましょうか」
ガルマはクラリスに向き直ると申し訳なさそうに言いました。
「人魚は、もういません。皇帝が死の床にあったとき、未練を断つように自分の目の前で人魚を焼かせて、灰にしてしまいました」
「なんですってえ～っ！？」

さすがに気のいいクラリスも怒りました。
「よくもだましたわね～！」
えーい、どんな呪いを掛けてやろうかしら？と思いましたが、
「肉のかけらなら、残っています」
とガルマが言ったので呪いを掛けるのは取りあえずやめてやりました。
「こちらへ」
とガルマに続いて全員でぞろぞろ霊廟へ上っていきました。霊廟の扉はクラリスの魔法で南京錠を外し、開いてあります。
ふたの開け放した棺の中で一つだけ、骸骨の眠っていた棺にふたがしてあります。クラリスはヴァルに命じてふたを開けさせました。ヴァルがガタガタ震えながら骸骨を持ち上げると、腰の下に黒い木片のような物が置かれていました。
「それが人魚の肉です」
ガルマの言葉に女官たちはそうそうこれを食べたのよと同意しました。
「これ・・・」
手のひらに包み込めるほんの小さな肉片です。真っ黒で硬そうで、食べ物には見えません。
「美味しいの？」
クラリスの問いに王女と女官たちは顔を見合わせました。
「ええ、まあ・・、味は良かったですよ・・。ねえ？」
「お肉の薫製とお魚の干物の中間くらいの感じで・・。ねえ？」
１０人は頷き合いました。クラリスはちょっぴり食べてみたい誘惑をいやいやと戒めました。
これが使えるものかどうか、クラリスは魔力で探ってみましたが・・
「あー、やっぱり駄目だわ。幽霊のままじゃぜんぜん魔力が足りないわ」
と、面倒なので自分も幽霊であることを認めてしまいました。

「解析は後。取りあえず海の精のところに送りましょう」
クラリスは若者たちに命じて王女たちの乗る船を用意させました。若者たちは仕方ないので自分たちが漁に使う2艘の船を浜に回しました。高貴な王女様が乗るには魚臭いですが、これくらいはお許し願わねばなりません。クラリスは若者たちに
「悪いわね。このお礼は後できっとするから」
と言いましたが、二人は
「そんな、とんでもない！　どうか命ばかりはお助けを」
と、お礼の意味を全然別に受け取って丁重に断りました。クラリスはまるで強盗扱いされて実に心外でした。そこで一番こき使ったグスターにそっと、
「あなたルネって子が好きなんでしょ？　彼女もあなたのことが好きよ」
と教えてやって、グスターが赤くなって頬をゆるめたので少しはお礼ができたかと自分に満足しました。
王女たちが5人ずつ漁船に乗り込みました。
「王女様たちには取りあえずカザリン国に行ってもらいます。このままここにいたのではやっかいなことになるでしょうから。カザリンの『ユリアナ・ローゼ社』という貿易会社にロヴィークのクラリスに言われて来たと訪ねていってください。絶対に悪いようにはしないはずですから」
「分かりました。けれどわたしたちこんな船を遠くまで漕いでいく自信はありませんよ？」
「それはだいじょうぶ、なはず・・」
クラリスは王女に人魚の肉を海に投げ入れさせました。クラリスがテレパシーを送るとほどなく2艘の船は海流に乗ってスルスル沖へ運ばれ出しました。
「さようなら、キャンディー姫。さようなら、仲間たち」
ガルマが手を振り、王女と仲間たちが

「さようなら。ありがとう、親愛なる友よ」
と手を振り返し、見る見る沖に小さくなっていきました。
東の空が明るくなって、もう夜明けです。
ガルマはクラリスを見つめて言いました。
「ありがとう。小さな、偉大な魔女よ」
「いえ、こちらこそ」
クラリスはニッコリ笑い、ガルマも微笑むと姿が透明になっていき、金の光の粉を振りまいてこの世から去っていきました。
クラリスは朝日を浴びてうーん・・と伸びをしました。
「さーて、夜の幽霊は退散しましょう」
クラリスも霊廟に帰り、古い鏡から自分の体に帰っていきました。
ようやく解放された４人の若者は心底ほっとし、墓場で肝試しなんてするものじゃないなと反省しました。でも自分たちがとんでもない伝説の体験者になったことに興奮し、グスターとルネは見つめ合って二人ともポッと頬を染めました。

第１０章　異変

一夜の冒険から目を覚ましたクラリスは。
「う、動けない・・」
体全体がものすごくだるく、力が全く入らず、体中の関節がギシギシミシミシ痛みました。
「霊体のまま一晩中外を出歩いて、おまけに魔力まで使って、無茶し過ぎよ」
大鏡の精に怒られてしまいました。この体の状態では全く反論の余地がありません。
「テレパシーで人の夢を渡り歩くのとは全然違うんですからね！」
「はーい。いたたたたた・・」
情けない。一晩で１１０歳の老婆になった気分です。
「あーあ、こりゃあ使い物にならないな」
ヴァイオレットに笑われました。
「そうね。夜まで寝てなさい」
大鏡の精にも言われ、
「ふあーい。でもその前に、いたたた・・」
ララベル姫を呼びだしてもらいました。
天井の大鏡にララベル姫の顔がどーんと巨大に映し出されました。
クラリスは弱々しく
「もうちょっとボリュームを下げてもらえないかしら？」
と大鏡の精に頼んでララベル姫の顔をふつうの大きさにしてもらいました。
「おはようクラリス。あら？なあに、寝てるの？」
「おはようございます、姫。このかっこうに関するお説教はもう勘弁してください。実は」
と、クラリスは１０００年前のブルータリス国のキャンディー王女が甦り、今カザリン国に向かっていることを知らせました。カザ

リンはポリスからそう遠くないのであの調子なら昼には到着すると思われます。
ララベル姫はうなずきました。
「なるほど、ローゼさんのところですね？」
ユリアナ・ローゼ社のカザリン支社長のローゼさんは前に話の出たルピネーさんの奥さんです。ま、この話はまた別の機会に。
「ええ。それと」
クラリスはそもそもの人魚計画について説明しました。
「まあ！　人魚ですか？　それはオーロラ姫が喜びそうですね」
「ええ。でも本物の人魚が姫のお気に召すかどうか怪しい気がしますけれど」
クラリスは苦笑しましたが、これは本音です。
「成功したらいいわね」
「ええ。オーロラ姫はどうしてます？」
「特に報せはないから、ま、例のごとくでしょう。きっともう妖精たちと仲良くなって楽しく過ごしているでしょうよ」
クラリスは想像して微笑みました。また夜の夢で遊びに行きましょう。
「妖精騒動はその後どうです？」
ララベル姫はちょっと考えるようにして言いました。
「落ち着いた気がします。昨日は街から騒ぎの声はありませんでした。犯罪がらみの報告はいくつかありましたけれど」
「そうですか。一応落ち着いているんですね？」
クラリスは星の光をなんとかしても、すでに生まれてしまった妖精たちをどうしたらいいのか良い考えが浮かばないでいたので、この報告にひとまずほっとしました。
「そういえば」
と、国境で出会った緑の妖精アリョーカと、山賊の仲間になった４人組の妖精たちの話をしました。ララベル姫はうーんと考えました。

「接触する人間に妖精たちは強い影響を受けるのね？　しかも、魔力を増す？」
「ええ。5人ともすっごく強かったわ」
「妖精がらみの犯罪も後を絶ちませんし、これは要注意ですね」
「ええ・・」
クラリスも困ったものだと思いますが、あまり妖精たちを悪者にしたくありません。
「みんなアリョーカみたいにいい妖精になってくれればいいのにねえー・・」
「そのためには人間がいい人間ばかりでないと駄目ですね」
「ですよねー・・」
妖精たちは世界の鏡。
星から生まれた新しい妖精たちは、人間たちの鏡になっているようです。

さて話に出てきた5人の妖精たち。
アリョーカはアロアのお姉ちゃんとして彼女と仲良く暮らしています。
4人組の妖精たちは盗賊グループと西南のメロディングに向かっています。おっかない魔女から逃れてロヴィークと反対側の国に逃げるのです。この盗賊たちは信用できるのかできないのか実に怪しいところですが、妖精たちとは馬が合うようです。
さてさて、この5人の妖精たちがこの日共通して感じたことがありました。

アリョーカはアロアと農家の子どもたち相手に遊んでやりながら、空をじーっと見ていました。アロアが「なに見てんの？」と訊くとアリョーカは答えました。
「空を渡っていく妖精たちの数が減っている」

アロアも空を見ました。妖精たちを指さし数え、
「う～ん、そうかなあー？」
と首を傾げました。アリョーカはその様子を見てフッと笑いました。
「ま、いいか。わたしには関係ない」
「アリョーカ姉ちゃん、あそぼ！」
「うん。あそぼう」
アリョーカは子どもたちに混じって遊び始めました。今度はかくれんぼをすることになりました。
「お姉ちゃんはあたしといっしょだよ。隠れるの上手すぎてぜんぜん見つからないんだもん」
「そうだね。じゃ、二人でなかなか見つからない場所に隠れよう」
「うん！」
アリョーカは駆け出すアロアの髪をしっかり掴みました。
決して彼女から離れないように・・・。

４人組の妖精たちは街で盗賊たちのスリの手伝いをしてやっていました。１人が人間にイタズラを仕掛けて盗賊にぶつかるように誘導し、盗賊の腰袋に潜んでいた１人が素早く人間の服やカバンから財布を抜き取るのです。それを２組に分かれてやっています。
要するに全然反省してません。
お金ならアジトからお宝を袋に詰めて背負っていますが、これは「あっちに行って一旗揚げるための資金」なのだそうです。何をするつもりやら。
街には他にも妖精たちがいっぱいいます。
けれど・・。
「チッ、他の奴らは全然覇気がねえな」
赤い妖精ロートフェイルが言いました。
「俺たちみたいな勤労意欲がねえんだよ」
黄色い妖精ゲルブサンダーが言いました。口は悪いですが妖精は

みんな女性っぽい姿をしています。
「いや、魔力が感じられない。見ろよ、ふわふわ漂ってるだけだ」
青い妖精ブローエイスがクールな目線で言いました。ロートフェイルもゲルブサンダーもなるほどなあと見渡しました。最初の頃の大騒ぎはすっかりどこへやら、みんな平和そうな顔つきでふわふわ漂って、人間たちの活気ある様子を眺め、人間たちの歩き回る空気の流れにあっちにこっちにふわふわ踊らされています。
元気がないというより、なんだか満腹の子どもがまどろんでいるような顔つき目つきですが・・・。
白い妖精バイスメッサーはそんな同族たちをきつい目つきで睨んで言いました。
「フン。俺たちは別さ。俺たちには目的がある。メロディングで一旗揚げて、いつかあのクソ生意気な魔女の城を乗っ取ってやるんだ！」
他の3人も力強くうなずいて「オーッ！」と腕を突き上げました。
「そうさ、俺たちは別なんだ・・」
バイスメッサーはギラギラした目つきで呟きました。たくましくなって、キャラクターがより強烈になっています。悪ぶってつっぱって、粋がって精いっぱい自分をアピールする人間のチンピラのように・・・。

夜。
クラリスは結局昼間のうちベッドから起き上がることができませんでした。夜になってようやくよたよたベッドから起き上がり、ヴァイオレットといっしょにレンタルの厩（うまや）にナージャの様子を見に行きました。ナージャも一日中つながれっぱなしで退屈しきっていました。
「ちょっとお散歩しましょうか」
クラリスはナージャを連れて街を抜けてひとけのない場所に出る

と、翼を広げさせナージャにまたがりました。
「それ行け！」
ナージャは大きく翼を羽ばたかせて宙に浮き、バサリバサリと駆け上がり、気持ちよさそうに夜空を駆け出しました。
海岸沿いに飛んでいきます。浜辺ではたいまつがたかれ、若い恋人たちが肩を抱き合い黒い海を眺めてます。
クラリスは試しにナージャに海の上を飛ばせようとしましたが、やはりナージャは海の上は怖がって嫌がりました。
「どーどーどー。ごめんごめん。そうね、直接クレオバトラに行くのはあきらめたわ。あっちはリラさんたちに任せておきましょう」
クラリスは頭に乗っかっているヴァイオレットをつまんでナージャのたてがみに座らせて話しました。
「あんた大鏡さんとはうまくいってんの？」
なんといってもヴァイオレットは永遠の女の子で人見知りが激しいので心配です。でもヴァイオレットは
「おう！　あたいらもう友だちだよ。いやー、大鏡お姉さんはミラと違って人間が出来ていらっしゃる。楽しいぞ」
「あっそう。よかったわね」
要するに大鏡の精は大人で、ヴァイオレットと根気よく接してくれたのでしょう。鏡の精ミラは怒りっぽいのでダメです。
「ねえ、じゃあリラさんとはどう？　仲良くなれたの？」
「うーーん・・、まあねえーー・・」
いまいちなようです。クラリスも不満そうに悪口を言いました。
「あの人って本当はけっこうすごい妖精のはずなのよね。その昔は妖精界ナンバー1の実力者って言われてたんでしょ？」
「オーロラ姫の守護精霊になってからさんざんだよな。あーあ、だあーれのせいかなあ～～？」
「お黙り。でもほんと、ちっともすごいところがないわよね。・・ま、試してるんでしょうけれどねー」
「なにを？」

「あたしをよ。きっとあたしのことを信用しきってないんだわ」
「そうかなー？　そんなに陰険じゃないと思うけどなー、誰かさんと違って」
「おだまり。だってちっとも役に立ってくれてないじゃない？」
「あたいも・・役に立ってないぞ、ぜんぜん・・」
「あんたはいいの。ただの友だちなんだから。わたしの側にいてくれればそれだけで嬉しいんだから」
「ほんとか？」
「本当よ」
「でへへー」
「えへへー」
クラリスはまたヴァイオレットを自分の頭に乗せてやりました。
「あなたもね」
クラリスはナージャのたてがみにもキスしてやりました。ナージャも嬉しそうにヒヒーンといななきました。
「ねえ、あれってモナの街なんじゃない？」
まだ遠いですがこちらローゼンヌののどかなたいまつとは明らかに違った大量の明かりがまとまった光が真っ暗な陸に浮き上がっています。
「行く？」
ヴァイオレットがまた臆病になって心配そうに言いました。
「いえ、まだ本調子じゃないから。まーた妖精たちに目の敵にされて集団で襲ってこられたらたまらないわ。あそこにはたぶん大量の妖精たちが流れていっているはずだから」
「えへへー。おまえすっかり妖精どもに手配書が回ってるみたいだもんなー」
ヴァイオレットが安心したように言いました。
「はい、お散歩はここまで。ナージャ、ごめんね、今日は帰るわよ」
ナージャはお利口にぐるっと回って元来た方に帰り始めました。
モナの街の灯が遠ざかって、山に隠れて見えなくなりました。

もしクラリスがこのままモナの街に行っていたら、妖精たちに起こりつつある異変にもっと早く気が付いたでしょうに・・・。

ホテルに帰ってくると大鏡の精はもう寝ていました。
妖精も眠ります。一部夜の妖精を除いて、夜になって回りから光が消えると、自然と魔力が落ち着いて眠くなるのです。
大鏡の精はふわふわ宙を漂いながら眠っていました。
「あらもう？」
鏡一族は夜行性の者もいますが、大鏡は姿見として使われることが多いので昼間の妖精なのでしょう。昨夜は朝方まで鏡を覗いていて疲れたのでしょう。
「じゃわたしたちも寝ましょう。お休みなさい」
「うん、お休み～」
夜更かしの続いているヴァイオレットも大あくびしました。くう～・・とすぐに寝息を立て始め、クラリスも布団に潜るとこちらもまだまだ休息が足りておらず、すぐにスースー寝息を立て始めました。
その途端、大鏡の精がクルンと立ち上がりました。寝たふりをしていたのです。大鏡の精はクラリスの寝顔を覗き、
「やはり黙っていた方がいいでしょうね」
と呟きました。クラリスが出かけている間彼女は妖精の国のミラと鏡を通して話をしていたのです。
そこでいったい何が話し合われたのでしょう？
彼女は何をクラリスに隠しているのでしょう？
クラリスは平和な顔でぐっすり寝入っています。

朝です。
元気に目覚めたクラリスはガツガツ朝食を取ると大鏡の精にミラと話したいと頼みました。

大鏡の精は壁に大鏡を出現させ、妖精の国のミラを呼び出しました。大鏡に人間大のミラの全身が現れました。
「おはようございます。どうです、鏡一族の方は？」
そろそろ星の光を海のガラスの塔に導く準備をしてもらわなくては困ります。
「姿見の精がクレオバトラの海に到着しています。他の皆もだいたい各々持ち場に向かっています」
遠くまで飛んでいくのはたいへんですが、鏡の精一族の優れたところは、1人がある地点に到着すればそこに魔法の鏡を出現させ、そこに仲間を呼び寄せることが出来ます。ですから一番遠い持ち場の姿見の精が到着しているということはその途中途中の一族ももう到着していてしかるべきなのですが、なんにもない海の上で待たされるのも退屈ですし、長老たちはギリギリまで腰を上げないつもりでしょう。
ちなみに大鏡の精もクラリスの用がなくなれば姿見の精のところに飛んで、その一つ手前の持ち場につく予定です。
「じゃあガラスの塔建設の進み具合は分かります？」
「きのう一日で8割方建設し、今朝も朝から張り切って作業していますから昼前には完成するでしょう」
「ああ良かった。じゃあわたしも急がなくっちゃ。ああ、ミラさん、わたし本物の人魚を見つけたんですよ？！　丸ごとじゃなくってお肉のひとかけらですけれど。これで本物の人魚を誕生させられるかもしれませんよ？！」
クラリスは得意になってニコニコ報告しました。
「さっそく姿見の精さんに連絡して海の精と話さなくちゃ。人魚の肉は無事届いたかしら？　ああん、わたしもガラスの塔を作っているところを見たかったなあ。ミラさんはもう見ました？　どんな素敵な塔が出来上がるんでしょうね？」
ニコニコ。
「それじゃあミラさん、また後ほど。よい報告を待っていてくださ

いね！」
「ああ、待ちなさいクラリス」
「はい？」
「ダイヤ女王様からお話があります。そのまま聞きなさい」
「はい」
スッと鏡の中の映像が宮殿のダイヤ女王の姿に変わりました。
「クラリス。ご苦労様です」
「はい、女王様」
ダイヤ女王はあまり元気のない顔でごきげんな笑顔のクラリスを見つめました。
「どうかしました？」
ダイヤ女王は頷き、ゆっくり口を開きました。
「生まれる妖精の数が急速に減ってきています。妖精の木の星の光が、弱まっています」
「・・・・・・・・」
クラリスの顔から笑みが消え、何か問いたげに女王を見つめました。
女王はとても気の毒そうに、慰めるようにクラリスに言いました。
「やがて星の光は消えます。報告では人間界に出ていった妖精の子たちも急速に数が減ってきているそうです。この妖精騒動は、自然に解決します」
「星の光が消えて・・、妖精が、消える・・・・」
女王は頷きました。
「そうなのです。あなたはもう何もする必要はないのです」

アロアは今日もアリョーカ姉ちゃんと農家の子どもたちの子守です。
他の子たちも楽しそうに遊ぶ姿に寄ってきた妖精たちと仲良くなっていました。アロアばかり妖精の力を借りてかくれんぼや宝探し

ゲームが上手になっていたので、子ども1人に妖精1人がペアになってこれであいこです。
石のおはじきで陣取り合戦をやって遊んでいると、1人の妖精があくびをしてふわふわ漂いながら上に上っていきました。ペアの子が
「おーい、俺たちの番だぜー？　石に乗っかれよ」
と呼びかけましたが、
「ごめーん、あたいなんだか眠くなっちゃって、もう・・・、おや・・・すみ・・・」
と、大あくびをして、膝を抱えて丸くなると、そのままふわふわ漂い、姿が薄くなったと思うとそのまま消えていなくなってしまいました。
その妖精1人ではありません、空には他にも何匹かの妖精が子どもたちの遊ぶ姿を眺めていましたが、その妖精たちも次々あくびをして体を丸めると、すやすや眠り、そのまま透明になって消えてしまいました。
「あたしたちも・・」
「もう眠いや・・」
「ばいばーい・・」
「おやすみー・・」
せっかく子どもたちと仲良くなった妖精たちも次々釣られるように空に浮かんでいき、体を丸め、スヤスヤ、空に溶け込むように消えていきました。
「アリョーカ姉ちゃん・・」
アロアが瞳をウルウルさせて言いました。
「お姉ちゃんは眠くない？　消えちゃったりしないよね？」
アリョーカは自分の手を見つめて言いました。
「さあ・・、分からない。でも、何かが違うのは気付いていた。あたしたちの命の源が、消えようとしているんだ」
「お姉ちゃん、また死んじゃうの？」
アロアは大粒の涙を溜めて顔を歪めました。

「やだよお、お姉ちゃん行っちゃわないで。あたしをまた一人にしないでよお～～」
やっぱりわ～んと泣きだしてしまいました。
アリョーカは飛んでいってアロアの額にピタッと張り付きました。
「アロア。あたしが見えるか？」
「え？　近すぎて分からないよお～」
「そうさ。でもあたしはここにちゃーんといるよ。姿が見えなくたって、あたしはいつもアロアのすぐ近くにいるよ」
「そんなのやだよー、姿が見えなくちゃ寂しいよお～」
「アロア・・」
「やだやだやだあ～～、うわあ～～ん・・」
結局アロアは泣きやみませんでした。
「いっしょにいるから、ね？　最後の最後まで、あたしはいっしょにいるからね」
アリョーカはよしよしとアロアの頭を撫でてやりましたが、そのアリョーカもひどく寂しい顔をしていました。

「おらおらおらあ～～っ！」
悪党妖精４人組はレストランを襲い、客を追っ払い料理を平らげ、厨房に侵入してコックを脅して次々料理を作らせ、できた側から片っ端に平らげました。
「うわっ、こら、やめねえか」
盗賊仲間の人間が止めても、
「やっかましい！」
栄養過多で有り余った魔力をドッカンドッカン爆発させ、レストランの壁をぶち壊し屋根を吹っ飛ばしました。
騒ぎに警察隊が駆けつけると彼らもまとめてドッカンとやっつけました。
「ギャハハハハハハ」
さんざん食って飲んで暴れて、大笑いです。

「お、おい、ほんとにどうしちまったんだよ？」
盗賊が恐る恐る訊いても、
「うるっせえな！」
妖精たちは凶暴に吠えました。
「力がいるんだよ！　体にエネルギーを充満させて、大暴れしてみんなの注目を集めねえと・・」
４人は力なくうつむき、
「俺たち消えてなくなっちまうんだよ・・」
キッと顔を上げ、
「消えてたまるか！　俺たちは」
「生き残ってみせる！」
うおー！とまた大暴れ。手が付けられません。盗賊たちもつき合いきれず逃げ出しました。
４人組の極悪妖精たちは人を襲い、建物を襲い、食べ物を食い散らかし、街を破壊しながら暴走を続けました。

第１０章　異変（後書き）

残り後２章。明日まとめて。

第１１章　生命との対話

「星の光が消えて妖精たちが消えてしまう・・」
クラリスは強い視線でダイヤ女王を見て言いました。
「そんなの嫌です」
「あなたが嫌だと言っても・・」
ダイヤ女王は困ってクラリスをなだめました。
「あなたはあの星の光をその上に生命を誕生させることなく滅んでしまった惑星の魂なのだと言いましたね？　それはつまり、肉体の滅んでしまった魂が未練を持ってこの世にとどまった姿、つまり、幽霊ということでしょう？」
「そうです・・」
「だったら、星の光は思い切り生命を誕生させ、その生命たちに思いっきり活動させ、満足した、つまりこの世への憂いを晴らしたということでしょう？　この世への未練の無くなった魂がどうなるか、あなたもよおく知っているでしょう？」
「・・・・・・」
クラリスもよく分かっていますが答えたくありません。女王はなおも優しくなだめるように言います。
「よかったじゃないですか、これが一番自然な解決です。こちらは少し・・というか大いに迷惑をかけられましたが、それで一つの星の魂が満足して眠りにつけるというなら、それもかいがあったというものです。一番迷惑をかけられたのは、あなたでしょう？」
それはそうかもしれませんが・・
「ここは素直にこのまま静かに送りだしてあげましょう？」
「・・・・嫌です・・」
この女の子の頑固さにダイヤ女王もちょっと持て余して困った顔をしました。
「人魚を復活させるということでしたが、それをする必要はあるの

ですか？
あなたは、母親と同じ過ちを犯そうとしているのではありませんか？」
「わたしは生まれるべきではなかったということですか？」
「そうは言っていません。ですが・・」
ヴァイオレットがクラリスの肩を抱くようにして泣きそうな目でダイヤ女王を見つめました。女王はほとほと困り果てました。
「わたしだってあなたが好きですよ。ですが、あなたがやろうとしていることは、けっきょくあなたの我が儘ではないのですか？」
「わたしの我が儘かどうか、本人に直接訊いてみます」
言うが早いか、クラリスの精神は肉体を離れて鏡の中に飛び込みました。
体がバッタリ倒れて、ヴァイオレットが下敷きになってうーんうーんとうめきました。

「困った人ね」
目の前に飛び出したクラリスにダイヤ女王はため息をつきました。
「このままそっとしておくのが一番いいとわたしは思うのよ？」
「わたしは嫌です。あの星の光にも自分が生み出した生命の責任は取ってもらいます」
「生命の寿命はそれぞれよ。たった一日の命の虫だっているのだから」
「妖精は何百年でも平気で生きているじゃないですか？」
「そうね。でももしこの地球が無くなってしまったら、わたしたちもいっしょに消えてしまうと思うわ。ま、誰も生きてはいられないでしょうけれど」
「そんなことありません。地球が壊れて無くなったら、第2の地球を捜すまでです」
「あなたならやりかねないけれどねえ・・」
ダイヤ女王はこの魔女の女の子が将来どれほどの大物になるのか

推し量り切れません。
「じゃあ訊くけど、あなたは自分のやろうとしていることに責任持てる？」
「持ちますよ、最後の最後まで」
「あっそ」
ダイヤ女王もこの魔女の頑固さに降参しました。
「じゃどうぞ。わたしはお手並み拝見とさせてもらうわ」
「行ってきます」
クラリスは飛び立ち、大きな花の宮殿を出ると国の中心の妖精の木に向かいました。
なるほどあれだけうじゃうじゃ邪魔っけだった妖精の子どもの姿がほんのちらほらとしか見あたりません。目指す妖精の木も白い光がすっかり弱くなり、本来の茶と緑の幹の色が現れています。
クラリスは白い光を目指し、幹の中に飛び込みました。
世界が広がりました。外の世界の全てがここに内包されているのです。
クラリスは白い光を捜しました。
ありました。空に輝いて、世界に散らばる自分の子どもたちを眺めています。
その光の、なんとか細いことでしょう。
今、光は眠りにつこうとしているのがありありとしています。
クラリスは迷いを感じました。ダイヤ女王の言うとおり、このまま光を眠らせるのが一番なのかもしれません。
でもクラリスは思いました。自分は魔女なのだから、自分の思ったとおりに行動する、
神の摂理なんて、知ったことか！
「星さん」
クラリスは精いっぱい空に飛び上がって星の光に呼びかけました。か細く弱まったとはいえまだまだ中心には強烈な光エネルギーを宿しています。クラリスは、それが欲しいのです。

「あなたは本当にすっかり満足してしまったの？　生命を生み出すだけで満足？　あなたの子どもたちは全然満足してないわ！　見て！」

クラリスは地表の一点を指さしました。クラリスが思うと世界の情報がわーっと押し寄せてきて自分から教えてくれるのです。その代わりクラリスの思考は圧倒されて自分がバラバラに分解されそうになってしまいます。

クラリスの指さした先、アリョーカが泣き疲れて眠ってしまったアロアを優しく撫でて歌を歌ってあげています。自然と出てきた歌ですが、これはアロアが姉のアリョーカから歌ってもらった遊び歌です。

「それから、あれ」

指さす先には４人組の極悪妖精たちが街を破壊しています。クラリスはえい！と思念を送り、魔法の手で４匹を捕まえ、ジャムのビンに入れてふたを閉めてしまいました。妖精の弱点なんてお見通しです。

さらに、

「ほら、あそこにも、そこにも」

クラリスも知らなかった人間と仲良くなった妖精たちが次々アピールしてきました。たいていアリョーカのように子どもと仲良くなった者でしたが、４人組のように悪い人間に利用されてそれでもそれを楽しんでいたり、お爺さんお婆さんに子どものようにかわいがられていたり、中には人間に恋したり恋されたりといった者もいました。

「ご覧なさい、こんなに今の生活を楽しんで、自分の人生を生きようとしている子どもたちがいるわ！　でも彼女たちは自分の力が衰えてきていることを知っている。自分の存在の源が消えてゆこうとしているのを知って不安に思っている。お願いよ、彼女たちに、この世界で生き続けてゆける力を与えてあげてちょうだい！」

星の光から疑問が発せられました。

クラリスは心で受け取って自分の言葉に翻訳します。
『われわれはしょせんあなた方にとっての夢でしかないのではないか？』
クラリスは答えます。
「楽しい夢ならそれが本当であってほしいと思うわ」
『一部の子どもは受け入れられているようだ。しかし全体を見れば、やはりわれわれは邪魔なよそ者ではないか？』
「害虫は困るけれど、人間なんて、もともとみんな赤の他人よ。遠慮なんかしてたら友だちになれないわ」
『望めば、受け入れられるのか？』
「もちろん」
『本当か？』
「本当よ」
『本当か？』
「本当だってば」
『人間は迷惑に思っている者がほとんどだ。本当に、受け入れられるのか？』
クラリスも星の光が聞いている人間たちの声を聞きました。たしかに、迷惑がって文句を言っている声が大量に上がっています。妖精が消えていくのを喜んでいる声も多く上がっています。
「えい！」
クラリスはそういう人間たちの上でゴロゴロ恐ろしい雷を鳴らしてやりました。今のクラリスは地上に対して神のごとき存在です。
腰に手を当て、フンと鼻を鳴らしてクラリスは言いました。
「どーでもいいわよ、人間なんて。人間こそ他の生き物から見れば害虫みたいなものよ。ま、中にはいい人間もたくさんいるけどね。ねえ、そんなこと、遠慮するだけ馬鹿を見るわよ？　わたしがここに訊きに来たのはね、あなたがどう思っているかってことよ」
『わたしが？』
「そうよ、あなた」

『わたしが』
「あなたが、本心で何を望んでいるか、どうしたいのかってことよ」
『わたしのしたいこと。
わたしは、生まれたかった』
「生まれたわよ。それから」
『生きたい』
「生きているわよ」
『このまま、生き続けたい』
「だったら生き続ければいいわ。消えてしまうことないわ」
『だが、わたしは邪魔なよそ者だ』
「だからあ、人間のことなんて気にしなくていいってば」
『この星の命が、わたしに出ていけ、消えろと言っている』
「！」
突然クラリスは巨大な敵意に包囲されていることに気付きました。どこからというのではありません。周りの世界全部がクラリスに強烈な敵意を発しているのです。
さすがの怖いもの知らずのクラリスもゾッとしました。
星の光が言いました。
『残念だよ、小さな魔女よ。わたしに味方してくれたことに心から感謝する。そして、道連れにこの世から消されてしまうことに心からすまなく思う』
ざわざわと強烈な悪寒が全身に走りました。クラリスの体が無力に切り取られ、世界に飲み込まれようとしています。クラリスという存在をバラバラに分解し、別のものに再構築する材料にしてしまおうとしているのです。
『さようなら、魔女よ。ありがとう』
星の光も発する光をはぎ取られ、急速に小さな核に収縮していきました。
「負けるものですか・・」
クラリスは頑張って自分を保とうとしましたが、踏ん張りが利き

ません。星の光同様、人間の形を分解され、核の魂だけになっていきます。人間の形と共にこれまで生きてきた記憶が奪われ、消えていきます。お母さんのこと、お父さんのこと、大事な友だちのこと、シルバー王子のこと、オーロラ姫のこと、ヴァイオレットのこと、ララベル姫のこと、みんな、みんな・・・

わたしの死だ、

と、最後の核の一粒になる手前でクラリスは思いました。

わたしは、おわる・・・・・・・

突然、

急速に自分が再生されていきました。記憶が戻ってきます。自分が形作られていきます。

世界がひどく怯えているのが感じられます。

とてつもなく強大な敵が立ち上がり、世界を脅迫しています。

「消すぞ」

その言葉の真実に世界は怯えているのです。

何者であるか、クラリスには分かり切っています。

「お母さん」

クラリスはニッコリ笑いました。

「ありがとう。でも、世界は消さないでね？」

クラリスは世界の隙をついて世界の内包する魔力を一気に自分に集中させました。

「行くわよ、生きるわよ！！」

クラリスは最後の一粒になって消えようとする星の光を自分の胸に飲み込みました。

クラリスは光になって妖精の木から飛び出しました。

ダイヤ女王とミラが心配そうに宮殿の前に立っています。大勢の

妖精たちも心配そうな、怯えた顔でクラリスを見ています。
クラリスは銀色の光を放ちながら空中にたたずんでいます。
「ごめんなさいね、みんなとケンカなんかしたくないけれど、わたしはわたしの好きなようにさせてもらうわ」
ヒュン、と、クラリスの姿が消えました。
光となったクラリスはこの宇宙で最速の存在となったのです。
「どう思います？」
ダイヤ女王が花びらの陰にたたずんでいた1人の妖精に訊きました。
全身全てが真っ白に輝いて、顔さえ判別できない妖精が現れました。
妖精の中の真の実力ナンバー1、しかしあまりに特別すぎて常に自分を隠すようにしていなければならない、光の精です。
「あの子は妖精の子どもたちに光を分け与えるつもりでしょう。この世界の物である自分の魔力といっしょに。しかし光と一体になった魂はもはや自分の肉体を持つことはできません。永遠にこの世をさまよう幽霊になってしまったのです」
ああ、クラリスはとうとう本物の幽霊になってしまいました。
「なんとか出来ませんか？」
ダイヤ女王はすがるように言いました。
「わたしはあの子を失いたくありません」
光の精の表情は全く伺い知ることはできません。
「その方法を知っているとすれば彼女ですが」
「母親？」
「任せれば何をしでかすか分かりません」
「本当に世界を消しかねないわね」
ダイヤ女王はため息をつき、決心して顔を引き締めました。
「わたしたちでなんとかしましょう。なんとしてもクラリスの魂を肉体に戻します！」

第１２章　誕生

クラリスは光のスピードで世界を飛び回り、妖精たちに星の光を分け与えていきました。
アリョーカに。悪党４人組に。初めて会う人間と仲良くなった妖精たちに。その他消えたくない生きたいと思っている妖精たちに、手当たり次第に。
しかしだんだん自分の意識が薄れていくのを感じました。今クラリスの魂は光と一体になっているのです、光を分け与えるのは自分の体を分け与えていると同じなのです。
クラリスの意識はもうろうとし、いったい自分は今どこに向かおうとしているのか、まるで分からなくなってしまいました。
自分はどうなってしまうのだろう？
自分は結局消えて無くなってしまうのか？
自分のしようとしていることは間違っていたのか？
まあいい、と思いました。
最期は、お母さんのところに帰ろう、と。

クラリスはまだ光を与えていない妖精の姿を捜しましたが、もう視界が暗くなって何も見えなくなってきました。

こっちよ、
と強く自分に呼びかける声を聞きました。向かうと、今度は、
こっちよ、
と、また強く自分を呼ぶ声がします。
こっちよ、
こっちよ、
こっちよ、
クラリスはもう何も考えることができなくなり、ただただ声を頼

ってあっちこっちに飛び回りました。
ふと、そうか自分は何かに反射して飛ばされているのだと思いました。しかしそれが何を意味しているのか考える気力がありません。
「つかまえた！」
耳元で声がしてクラリスはハッとしました。暗かった視界がまぶしいほど明るくなっています。しかしそこに見た物は、無限に増殖した、無数の自分の姿でした。
「へへへへへ。無限地獄の居心地はどうだい？」
声が外から響いてきます。
「いかに光のスピードで飛び回ろうと、閉じた鏡の世界ではどこにも行きようがないだろう？」
「あなたは誰？」
「あたしは万華鏡の精さ」
鏡一族の中の変わり者で有名な妖精です。
「他のみんながあんたを鏡で反射してあたしんところに誘導して、何度も失敗したけれどようやく鏡を閉じてあんたを捕まえることができたよ。あんた、捕まるまでにこの地球を何周して来たんだい？」
「わたしをどうするの？」
「えへへへへ、このままあたしの光のコレクションに加えちゃおうかなあ？　ま、女王に怒られるからやめておくけど。
あんたを計画通りガラスの塔に入れる」
「ああ、そうだったわ。もう完成しているの？　あれを星の光をとどめておくために作ったんだったわね。わたしにずうーっとそこにいれって言うの？」
「知らない。ミラに聞きな。あっちで待ってるから」
万華鏡の精はクラリスを閉じ込めたボールの形に閉じた多面鏡を持ってクレオバトラの沖の海に飛んでいます。運ばれながらクラリスはだんだん頭がはっきりしてきました。万華鏡の精が鏡を通して魔力を分けてくれているのです。
ずいぶん時間が経ったような気がします。無数に連なる自分の顔

を見続けて、さすがにかわいい顔にも飽きました。
ようやく到着したようです。ミラの声が呼びかけました。
「クラリス、だいじょうぶ？」
「ミラさん。あんまりだいじょうぶじゃないみたいです」
「でしょうね。長老の話によると、あなたは今の状態では元の体に戻ることはできないわ。幽霊よりもっとやっかいな状態ですって」
「今回わたしやたらとお化けに縁がありますね？」
最初に自分から名乗ったのが運の尽きです。
「それで、どうなんでしょう？　わたしは元に戻れるんでしょうか？」
「少しは反省しましたか？」
「は～い、ごめんなさ～い」
「反省してませんね」
「すみません。反省してます。元に戻れるよう協力してください」
「よろしい。リラから説明してもらいます」
「クラリス」
「リラさん」
「みっともないことになったものね」
「いい気味だと思ってません？」
「ちょっと思ってるかなー？　ウフフ。
ま、ここであなたに貸しを作っておくのもいいでしょう。オーロラ姫を悲しませるわけにもいきませんしね。
よく聞きなさい。
あなたはすでに自分のかなりの部分を失っています。あなたのあなたである要素は世界中に散ってしまっています。自業自得ですが。
いいですか、あなたはそれを全て取り戻さなければ自分に戻ることはできません。
あなたはこれからガラスの塔に入って最後の核が消え去るまで世界中に光を放ちなさい。
そして、

世界中からあなたの要素を全てコピーして妖精の木に戻ってきなさい。
妖精の木から脱出できれば、鏡を通って元の体に戻ることができるわ。
出来る？」
「やりますよ。幽霊なんてもうこりごりです」
「おちゃらけている余裕なんてありませんよ。あなたは一度完全に自分が無くなるのです。わたしたちがあなたのことを思ってあげますから、それを頼りに自分を一から組み立て直さなければなりません。嫌なこと、悲しいことも、全てです」
「はい・・」
「カギになるのはガラスの塔から光を放つ瞬間です。光の体ではそれは本当にほんの瞬間のことになるはずです。その一瞬に、あなたは思いの全てを込めて自分を解き放たなければなりません。他の者ならば、確実に失敗します。あなたでも成功の望みはほんのちょっぴりです。覚悟はありますか？」
「はい」
「では、下が分かりますか？　あなたは今ガラスの塔の真上にいます。ガラスの塔は海中に建設されましたが、今妖精界から妖精が総動員してきて海上に支え上げています。あなたに命をもらった妖精の子どもたちも混じっています。皆があなたの戻ってくるのを願っています。いいですね？　下を、開きますよ」
パカッと足元が開き、クラリスは何も考えずまっすぐ下に落ちました。
自分の体が巨大に膨れ上がりました。光がガラスに馴染んでガラスの塔全体に広がったのです。
クラリスは慌てました。
「ちょっとちょっとー、わたしはいったいどういう風に見えているのーっ！？」
「とーってもいい顔してるわよ」

ガラスのぬめぬめした視界の向こうにリラとミラと海の精と、大勢の妖精たちがクラリスを見てニヤニヤ笑っています。サイケデリックな服と髪型の銀色の妖精が下りてきました。万華鏡の精です。
「あっはははは！　こりゃあ傑作だ！　よし、保存しておこうっと」
すーっと後ろに下がると鏡の箱を出現させ、ふたをして中に映った映像を保存しました。クラリスも一瞬チラッと見ましたが、思わず「キャー、やめてえー！！」と叫びました。
イルカの精もいました。
「なんだ、元気じゃんか？」
リラが難しい顔で首を振りました。
「いえ、キャラクターのほんの表層だけよ。ふだんは意識しない、けれど大事な部分がごっそり無くなっているわ」
それを聞いてクラリスも自分の深刻な状況を思い知りました。
「行ってきます」
リラがうなずきました。
「帰ってらっしゃいね」
「はい」
帰ってくる、みんなのところに、この世界に、
わたしに。
ガラスの塔は巨大な珊瑚の形をしていました。折れ曲がった枝枝の全身がパッと銀色に光って、それは一瞬のフラッシュで、ガラスの塔は元の透明な姿に戻りました。

アリョーカは目覚めたアロアにニッコリ笑って言いました。
「もうだいじょうぶ。わたしは決して消えたりしないよ。あの小さな魔女がわたしに命の光を運んできてくれたんだ」
ほんの瞬間的に光が突き抜けて、姿を確認したわけではありませんが、アリョーカにはきっとそうだろうと分かりました。

「ずーっとアロアといっしょだ」
アロアがニーッと笑顔になりました。
「やったあーーっ！！　お姉ちゃんだーい好き！！！」
両手に包んで頬に擦り寄せるアロアにアリョーカは小さく言いました。
「ありがとうアロア。わたしにわたしというものをくれて」
アリョーカは自分がここにいることが嬉しくてたまりませんでした。

悪党４人組も命の光を受け取って大喜びしました。ただしこちらはジャムのビンに詰められたまま牢屋代わりの鳥かごに詰め込まれてしまいました。
「ちきしょー、バッキャロー、出しやがれーっ！」
喚きながらニヤニヤ笑っています。
「ぜってーここから抜け出して復讐に行ってやるからな、待ってろ、生意気魔女っ娘め！」
そうしてまた元気に喚き始めました。一時身動きできず捕まっていますが、周りは栄養だらけですから脱出も時間の問題でしょう。

「あ、」
とサファイアの精が声を出しました。
「どうしたの？」
とオーロラ姫が訊きます。
「ううん、なんでもない」
窓の外を見ていたサファイアがにっこりオーロラ姫に向き直ります。
「クラリスったら飛び出していったきり。あーあ、わたしもいっしょに冒険がしたいなー」
「姫さんにはこれから大冒険が待ってるじゃないの。子どもを産むのってたいへんらしいよー」

「あーん、それは言わないのー。憂鬱になるんだからー」
と言いながらオーロラ姫はまん丸のお腹を優しく嬉しそうに撫でました。
「あ、蹴った！」
「えへへー、この子も分かったのかな？」
「え？　なにが？」
「ないしょ。後で本人から聞くといいよ」
オーロラー！と元気に王妃様がやってきました。
「見て見て！新しい産着！　わたしの刺繍の腕もだいぶ上達したでしょう？」
「今度は男の子用？女の子用？」
「女の子用よ！　お母さん絶対女の子がいいもーん！」
「わたしは男の子のような気がするんだけどなー。今も元気にけっぽったのよ」
「まあ！　どれどれ？」
王妃様も嬉しそうに姫のお腹にかがみ込んで耳を当てました。
「分かりますかー？　若くて綺麗なおばあさまですよー？　早くあなたに会いたいわ」
お仕事の休憩時間にシルバー王子も様子を見に来ました。
みんな幸せな顔で赤ちゃんの誕生を待っています。
男の子か女の子か？
分かるのはもうちょっと先ですが、もう遠い先のことではありません。

ヴァイオレットはもうイライラしっぱなしでホテルの部屋をぐるぐる飛び回っていました。
「だいたいなー、こいつ無茶し過ぎなんだよ！」
なんとか枕だけ頭の下に入れてやった、床に横たわるクラリスを指さして悪態をつきました。

「この世で自分に出来ないことは何もないって思ってやがる！　まだこんな子どものくせに！　だいたい母親の教育がなってないんだよ！　ちっとはなー、世間の厳しさってのを教えてやらなくちゃ駄目なんだ！　怖い物知らずで好き勝手なことばっかりやってるとそのうち痛～いしっぺ返しをくらうぞ。おい、こら、ちょっとは反省しろ！」

ヴァイオレットはクラリスの顔の上に下りて額をペタリと押さえて閉じた目を見つめました。

「おい、分かったか？　今度はちゃんと反省するんだぞ？　そしたらさあ、あたいも許してやるからさあ、戻ってきていいぞ。な、クラリス・・」

ヴァイオレットの目がまたウルウルしています。

壁に作った大鏡の前で大鏡の精は腕を組んでじっと鏡を見つめています。

「おーい、クラリスー、生意気な子ども魔女ー、いい加減起きないと顔にイタズラ書きしちゃうぞー・・」

ムンズと体を掴まれてヴァイオレットはキャーと悲鳴を上げました。

「いろいろ言いたいこと言ってくれてたわねー。ぜーんぶ聞いてたわよ～」

クラリスが半分まぶたを開いて陰険な目でヴァイオレットを睨みました。

「うわ～ん、バカクラリス～。こら、放せ！」

「放さないわよ～」

クラリスはチュッとヴァイオレットにキスしました。

「ごめんね心配かけて。ありがとう」

「うう・・、バカあ～～」

ヴァイオレットもチュッチュッとクラリスの頬にキスしてくすぐったがらせました。

「クラリス。お帰り」

大鏡の精も笑顔で言いました。
「ただいま、大鏡さん。お世話になりました」
クラリスは帰還しました。
世界を通って、自分に。

このお話はこれでお終いです。
ただ今回の事件は世界にいろいろな影響を与えました。
それを話すのは長くなるのでまた別の機会にして、
一つだけ紹介しましょう。

クラリスがポリスから送った人魚の肉片はちゃんと海の精の手元に届いていました。その肉片にもはや命はありませんでしたが、驚いたことに、肉体的な生命力はまだ微弱ながら残っていました。まあしかし、クラリスの人の心に入っていける能力なしでは海の精に出来ることはありません。そこで貝の中にしまって出番が来るのを待っていたのですが、結局それはなくなりました。
しかし。
クラリスがガラスの塔から全世界に光を放ったとき、世界の、不思議な生命、特に魔力に関係する者たちに多大な影響を与えていたのです。
この人魚の肉片もその一つでした。
その驚くべき生命力と星の光とクラリスの魔力が一体となり、奇跡としか言い様のない現象が起きました。
肉片が、透明な球体、卵に変わったのです。
卵は今も貝の中で成長を続け、徐々にその中に何物かの形を作りつつあります。
さていったいどんな生き物が産まれるのか？
それはまたのお話で。

終わり

第１２章　誕生（後書き）

いろいろ投げっぱなしですが第１シーズン終了ということで。先の展開はまだ考えていませんが、このシリーズはキャラクターたちに勝手に動き回らせようと思っています。どうなるのかわたしも分かりません。またお付き合いいただけたら幸いです。ありがとうございました。２００７，１２，２８

前日談があります。こちらはとっくに完成していますので・・今年中、あと3日でアップしましょうか？こちらもどうぞよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2576d/

妖精大進撃！

2010年10月8日15時00分発行